

---

# 聖杯に導かれし者

刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖杯に導かれし者

### 【コード】

N8693M

### 【作者名】

刹那

### 【あらすじ】

傷つき倒れた者。

己の願いを託し消えていった者。

だが聖杯はまだ彼を戦いへと誘う。

激闘の聖杯戦争が此処に幕を開ける。

## 序章 新たなる旅立ち

### プロローグ

過去の自分との戦い。

魔力供給の無いまま戦うとしても、負けられない。

それは向こうも同じ。

過去の自分を消すことで、紛らわそうとした自分。

「お前には負けられない、誰かに負けるのはいい。けど、自分には負けられない。」

そう言つてサーヴァントである、自分に立ち向かってくるかつての自分。

『衛宮士郎、お前を殺すことが俺の願いだ。』

正義の味方に絶望した自分と、

「決して、間違いではないのだから!!」

正義の味方に希望を見いだした彼奴。

その言葉で気づいた。

俺は嫉妬していたのだ。

正義の味方を語ることの出来る士郎に。

その時点で、俺は負けていたのだらう。

この男なら、俺と同じにはならんだらう。

遠坂が居る、セイバーが居る、桜が居る、それが彼奴の支えになるだらう。

「俺の勝ちだ、アーチャー。」

士郎の剣がシロウの胸を貫く。

勝者は何も得れず、敗者は何も失わない。

なんの意味もなさない戦い、衛宮士郎とエミヤシロウの戦い。

だが、彼奴はこれから先にも先に進み続けるだろう。  
きつと俺とは違う結末が待っているかもしれないな。  
それに俺も、これからの希望を見つけることが出来た。  
『ああ、そして私の敗北だ。』  
幾たびの戦場を越え不敗。  
これが生涯初めての敗走。

これでわかった、俺は間違っただけでなにかあったのだ。  
俺の生涯は意味ある物だったのだ。

ありがとう凜、ありがとう土郎、そして愛している

そして俺は英霊の座に帰るはずだったのだが、

「初めまして、シロウ。私はユステイーツアと申します。」

『なんでさ。』

シロウは無意識に溜息をつきながら言った。

ユステイーツアと言えば、ヘブンスフィール（大聖杯）のシステムの一部と為ったアインツベルンのホムンクルスだ。

『それで、なぜあなたのような人が1人の英霊である俺に話しかけたんですか？』

「あなたに折り入って頼みたいことがあるのです。アインツベルンの呪いのことです。」

『！！』

それを聞くとシロウがピクツと反応する。

アインツベルンの呪い、聖杯降臨のための器となることだ。

その所為で、イリヤや親父の最愛の人も。

用件は解った。

しかし、だからと言って俺に話しかけなくとも他にも良い奴が居ると思うのだが。

それをユステイーツアに尋ねると、

「いいえ、貴方だからこそ頼めるのです。衛宮切継の子でありイリ

ヤスフィールの兄妹である貴方だからこそ。」  
そう言うことか、なら俺の答は決まっている。

『了解した、我が剣を持ってアインツベルンの呪いを打ち砕くことをここに誓おう。』

これは誓いであり、俺の願い。

親父が残した、俺の大切な肉親。

必ずや守り通すことを誓おう。

「ありがとうございます。貴方ならきつとやり遂げると信じています。これは餞別です。」

そう言つて渡された物は小さな宝石。

だが、外見からは予想も出来ないほどの魔力量を感じられる。

正直言つて、英霊1人が現界する分はかなり簡単にできそうだ。

『これほどの魔力がこもった物をなぜ俺に。』

「イリヤスフィールが聖杯を取り除かれたとき、これがあれば蘇生できることが出来ます。」

『なるほど、確かにこれほどの魔力がこもっていれば可能だろうな。』

シロウは貰った宝石を懐に入れる。

赤い悪魔にはれないようにしなければな。密かにもう一つの誓いを立てるシロウであった。

『それで、俺は具体的にこれからどうすればいい。』

「ええ、今から私の力を使ってある時間に飛ばしますから。そこから貴方の望む通りに行動してください。」

聖杯とはそこまで出来るものなのかと内心驚きつつ、首を縦に振る。

『では行動を起こすのは、早いほうが良いだろう。頼む。』

「ええ、では行きます。」

ユスティーツアはそう言つとシロウの周りに光が現れシロウを包んでいく。

その光はシロウを包むとシロウを何処かへと運んでいく。

「エミヤシロウ、貴方に聖杯の加護があらんことを。」

ユステイーツアのその言葉が、その場にこたえました。

ここは何処だ。

俺はある病院で目を覚ました。

どうやら、上手くいったようだ。

見回して解ったがここはあの日、十年前に全てを失い親父に助けられて入院した病院だろう。

通りで見覚えがあるはずだ。

俺の傷はそう深くないらしい、やけどの跡が背中に大きく残っている程度だ。

そう考えていると、心に誰かが呼びかけてきた。

「そちらはどうですか。」

「ユステイーツアか、此方は上手くいったようだが、今の状況を教えてください。」

「はい、貴方は衛宮士郎の兄として転生して貰いました。」

「なんでさ。」

溜息をつきながらそう呟いた。

この先に何が待っているのかそれは誰も知らない。

彼らに聖杯の加護があらんことを。

**序章 新たなる旅立ち（後書き）**

次回、決意の証。始まりの剣。  
シロウの戦いが始まる。

## 報告（必ずお読み下さい）

### 報告

この「聖杯に導かれし者」と「明智家 天下統一への道」をかいて  
いる刹那ですが。

上記の二つの内一つに絞りたいため、後何話か連載しますので感想  
を下さい。

それぞれの感想を見てそれで決めたいと思っています。

期限は一応八月の十日ぐらいとしたいと思います。

どうか感想宜しく願います。

現在聖杯に導かれし者は序章しか書いていませんが八月の二日まで  
には五話程まで書きますので、それに合わせて明智家 天下統一へ  
の道も賤ヶ岳辺りまで終わらせたいと思います。  
なるべく早くお願いいたします。



## 第一章 始まりの序章

S a i d 士郎

「先輩、起きてください。」

どうやらまた土蔵で寝てしまったようだ。

薄目を開けると、高校の後輩である桜の柔らかな笑顔が目に入ってきた。

「ん、おはよう桜。」

「おはようございます先輩。」

「いつもゴメンな。早く行かなきゃ、また兄貴にどやされる。」

そう、俺こと衛宮士郎の兄、衛宮信一はこういう礼儀とかに厳しい兄弟なのはどうしてこうも違うのだろうか。

「それでしたら、信一先輩から伝言です。今日はいつもよりみっちりやるからな、だそうです。」

桜の一言で俺の心は地に落ちた。

信一との訓練は辛いが為になるのだが、こういう場合は此方のことなど構わずに拳を放ってくるからな。

「なら、朝食の準備をしよう。」

「それも信一先輩がやってくれましたから、此方に来たんです。」

ああ、今日は死んだかもな。

そう思いながら、俺は居間へと進んだ。

居間に入ると予想通り兄貴が朝食を並べていた。

その動き一つが鮮麗されていて、何処かの執事みたいだなと一度皮肉を言ったら、鼻で笑われたが否定はされなかった。

兄貴は食事を並べながら、俺に話しかける。

『やけに遅かった土郎、どうせまた土蔵で寝てしまったんだろう。』  
「うっ。」

『どうやら凶星らしいな。夜更かしも程々にしろよ。』  
「わかってるよ兄貴。俺だって一応頼まれてやってんだから。」  
「そうなのだ、俺が夜更かしてまで作業していた理由は藤ねえにストーブの修理を頼まれていたからだ。」

業者に頼めばいいのに、俺に頼んでくるのだ。

『確かに、大河がストーブが無くて暴れられては敵わんからな。』  
言い方が、悪いが確かにその通りであるため反論はできんな。

「それはともかく、そろそろ藤村先生が来る事じゃありませんか。」  
『ふむ、そうだな。そろそろ来るだろうから二人は座っていなさい。』

「わかった。ノわかりました。」

そして二人が朝食が並べられたテーブルの前に座り込む。

兄貴の料理は上手く、正直言って俺も料理に自身はあるが、兄貴には絶対勝てないと思う。

しかし兄貴は、いつか追いつけるさ、と言ってくれるが本当だろうか。

それから少ししたら、

「しつろーう、しーんいちー。ご飯食べに来たよー。」

バタバタという音と共に、隣の家に住んでいる藤村大河（通称冬木の虎）がやって来た。

藤ねえはいつも、信兄が作った料理を目当てに朝食時と夕食時はやって来るのだ。

『どうやら大河も来たみたいなので、食べるとするか。』

タイミングを見計らったかのように、兄貴がホカホカのご飯を盛った茶碗を四つ、お盆にのせてやって来た。

この冬木広しといえども肉親以外で藤ねえの事を大河と呼べるのは兄貴だけだろう。

この家には、四人分以外にいくつか予備の食器がある、何であるの

か聞くと、

『予想外な事態はいつ起きるかわからんだろつ。』  
だそつだ。予想外な事態つてなんだよ。

それから藤ねえもテーブルの前に座り、兄貴も藤ねえの隣に座る。  
なぜ隣に座るのかというと、

「信一お代わり。」

そう言つて、先ほどまでご飯が入っていたお椀を兄貴に差し出す。  
兄貴はそれを何も言わず受け取り、ご飯をよそう。

簡単に言えば、隣にいた方が簡単にお代わりをねだれるからだそつ  
だ。

正直言つて、藤ねえと信兄の二人は妙に息が合っている。

まるで昔から知り合いだつたかのように。

俺は、ふとカレンダーを見ていつた。

「早いな、もう一月の終わりか。」

その言葉に、兄貴がピクツと反応したことは誰も気がつかなかつた。

s a i d 信一

「早いな、もう一月の終わりか。」

迂闊ながらもその言葉に反応してしまつた。

一月三十一日、これから聖杯戦争が始まる。

これは魔術師の殺し合い、だが士郎はそれに飛び込むだろつ。

全く無鉄砲な弟を持つと苦労するものだ。

しかし、もうそんな時期なのか。

これから俺の本当の戦いだ。

アインツベルンの、イリヤの呪いを打ち砕くために戦わなければな  
らない。

それが、彼女との誓いなのだから。

自己紹介が遅れたな。

俺の名前は、衛宮信一。

ここにいる士郎が聖杯戦争に参加して、それから正義の味方を目指して戦い。

その末に絶望して、英霊となり聖杯戦争に参加して自分を殺そうとして、過去の自分に倒され新たな希望を見つけたときに。

大聖杯の一部である、ユステイーツアの頼みでアインツベルンの呪いを打ち砕くために転生した姿だ。

俺も、士郎の兄とは驚いたがまあいいだろう。

ここにいるの俺は、あの頃の自分にそっくりだ。

ただ違うのは、髪が白いと言うことだ。

それ以外に見分けるのは難しいだろう。

それから朝食が終わり、士郎達を先に送り出すと俺は片付けをする。今では自分のことを俺と言えるようになったが、昔は自分のことを私と言っていたが。それは大河に猛反対されて俺と呼ぶように為ったのだ。

しかし、まじめな場面では私と言っているがな。  
とりあえず急がなければな、今頃士郎はイリヤに会っている頃だろう。

しかし、いきなりあの物言いはどうかと思うがな。

「早く召喚しないと、死んじゃうよ。」

とりあえずインパクトはあった。

インパクトはあったが、それ以上にインパクトな事があったので忘れてしまっていたがな。

そう思いながら、準備をしていると。

『むっ、弁当を渡し忘れたようだ。まあ士郎は良いとして桜が心配だな。大河は周りが心配だ。』

食器の片付けを終えた俺は、四人分の弁当を持って急いで学校へと向かった。

**第一章 始まりの序章（後書き）**

感想宜しくお願いします

## 第二章 決意

それから時がたって昼食時。

士郎は桜に弁当を渡すために既に教室を出ている。

どうやら後藤くんとの会話に気をとられていたようだ。

早めに職員室に行かなければ、職員室が………、駄目だ考えただけでもかなりまずい状態だ。

それから、職員室に向かうと予想通り藤ねえが購買部に向かおうとしていた。

『大河、今日の弁当だ。』

そう言つて渡すと、トラの顔がパアツと輝いて嬉しそうな表情になった。

料理を作る此方からすれば、ここまで喜んでもらえれば嬉しいものだ。

「助かったわ、今日パンだったら今月のお小遣いが危なかったところだもん。」

その年で今だに、雷画爺さんからお小遣いを貰っているのか。

せめてコンビニ弁当を買うぐらいの金は残しておけよ。

弁当を受け取った、大河はスキップで職員室に向かった。

俺は、職員室に入って差し入れを渡す。

『教頭先生、差し入れです。皆さんで食べてください。』

「いつもすまないね。」

『いえ、これぐらいなら。』

今日の差し入れは、漬け物だ。

一から作り上げた信一の自信作だ。

正直言つてそこら辺で売っているやつより上手い。

その後、差し入れ争奪戦が始まったのは、言うまでもないだろう。

桜に弁当を渡した俺は、一路生徒会室に向かっていた。生徒会室に入ると予想通り1人の生徒が居た。

生徒の名は柳洞一成、この学園の生徒会長を務めている生徒だ。

「一成、兄貴の差し入れだ。」

そう言っただけ渡したのは、兄貴が作ったおかずの入った弁当箱。

兄貴曰く、幾ら寺の修行僧といえども、高校生が動物性タンパク質を欠いてはいかんだらう、だそうだ。

その為、兄貴はよく一成におかずを作っつけてやっているのだ。

一成は、それを受け取ると蔓延の笑みを浮かべた。

どこぞのレストランのシェフ並みに上手い、兄貴の弁当だ。

一度食べればやみつき間違いなし。

「誠、いつもこのようなものを下さってくれる、信一には感謝しなければ為るまい。」

「弁当ぐらいでいちいち大げさだな。」

「土郎はいつも食べているから解らんかもしれんが、一日に一回こんな食事があれば毎日が楽しみなのだぞ。」

確かに、柳洞寺の食事は時代錯誤と言っても過言ではないものだ。

幾ら実践修行のお寺だからってあれはないだろう。

俺がそう思うのも、前に兄貴と共に修行と称して泊まり込みに行っただけだ。たかが弁当だ。

ただし、その後に信兄が作った料理の争奪戦はもつと凄かったが。確かに、あれほどの料理に、多彩なレパートリーを持っているというのには凄いな。」

兄貴の料理のレパートリーは数え切れないほど多い。

洋、中、和全てを極めていってると言っても過言ではないだろう。

「彼ほど良い兄は居ないだろう。」

「そうだな、ただし嫌みや皮肉は多いけどな。」

それさえ直せば素晴らしい兄貴なのだが、本人曰く、「お前に皮肉を言わなければ、成長せんだろ。」  
「そう言うことだ、確かに兄貴は嫌みや皮肉を述べるが、それは俺が迷っている時や行き詰まっている時などに言ってきて、ヒント的なこと」

を述べるのだ。お陰で、俺も成長している。

兄貴が居なかったら、俺もここまで成長はしていないだろう。

「あの人が嫌みを言わなくなったからおかしいだろうが。」

「たしかにな。」

嫌みや皮肉を言わない兄貴、考えただけでもおかしくなりそうだ。

そんなたわいのない話をしながら、昼休みを終えた。

放課後、部活をパスして俺はバイト先である、コペン・ハーゲンへと向かった。

s a i d 信一

放課後の部活も終わり、学校が静まりかえっている時、信一は学校にいた。

信一は、校内を歩き回って何かを探している。

「ん、やはりあったか。」

そう言って、足も元に手を置く。

そして、一気に魔力を流し込んで破壊する。

『ブラッドフォート・アンドロメダ（鮮血神殿）か、おそらくライダーと言ったところか。これを起動させてはまずいな。』

これが起動すれば、中にいる人間全てが危険な状況に追い込まれてしまう。

あの惨劇は絶対に起こさせはしない。



とは言ったものの、今のところは打つ手無しと言ったところだろうか。

やれやれ、先が思いやられるな。

そう思いながら、きびすを返し自宅へと帰還した。

家に帰ると、既に二人が食べ始めていた。

二人というのは、今日は大河が明日の職員会議の資料を作ると言うことで、来れなくなったためだ。

「兄貴、今日はやけに遅かったな。」

『まあな、調べ物をしていてな。その所為で気がつけばこんな時間になっていた。』

そう言いながら、荷物を下ろしテーブルの前に座る。

今日の夕飯は桜が作ったようで、洋食を中心に作ってある。

和食は士郎、洋食は桜、中華は凜。

三人とも上手いが、まだまだ私には届いていないな。

夕食を終え、食器の片付けを終え、桜が帰宅する時間帯になってきた。

「桜、夜道は危険だから送っていくよ。」

「いえ、先輩は疲れてるんですから。大丈夫ですよ。」

桜はすまなさそうに断る。

理由は分かっている。おそらく慎二のことだろう。

慎二は桜がここに来ていて、ことを快く思っていないのだ。

一度ここにやってきて連れ戻しに来ていたが、その時は私が言い切るめておいた。

それ以来、慎二は信一のことを苦手に行っているのだ。

信一に口で勝つのはかなり難しい気がする。

「いくら何でも、こんな夜道に1人で歩くのは危ないぞ。」

「でも。」

それを見かねた信一が助け船を出した。

『桜よ、そのヘタレと一緒に帰るか、これ以降夕食時征こうにこの

家に来ないかどちらかだ。』

我ながらこの作戦は、酷いものと思うが桜のことを心配しているからな。

私としては、士郎は凜と桜のどちらでも構わないのだがね。

まあ、あの鈍感が気付くかと言うことが気になるが。

「わかりました。先輩お願いします。」

「よし、任せておけ。」

そう言うと、二人は家を出て行った。

『士郎。今日は実践訓練だ。本気でかかってこい。』

「良いぜ兄貴、今日こそ一太刀入れてやる。」

『ぬかせ若造。』

両方とも投影で生み出した武器を取り出す。

武器と言っても木刀である。

投影する理由は士郎の投影魔術の特訓だ。

認識阻害の魔術式が込められてある結果を張っているため、遠坂からは気付かれないだろう。

士郎が木刀を持って突っ込んでくる。士郎は木刀と体を強化して速さを上げてくる。

それを信一は二本に折った木刀で受け止める。

続けて士郎は強化した足で回し蹴りを放つ。普通に受け止めれば、吹っ飛ばされる威力の蹴りだが、信一はそれを強化した木刀で止める。

信一はそのまま蹴りを押し返して、士郎を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた士郎はそのまま壁に直行する。

しかし、これまでは士郎の予想通り、ここからが勝負。

ダンッ！！

強化した脚力を使って、壁を蹴りそのままのスピードで信一に斬りかかる。

信一は、それを体を少し横にずらすことで回避する。

(ここまでの動きは、良い。見せてみる土郎、お前の戦いを。)  
(ここまでは予想したとおりだ。そして避けられることも了承済み、でもこれなら。)

土郎は床に激突する前に右腕を強化して止まる。そしてそのまま回し蹴りを入れる。

『ほう、良い判断だ。』

信一はそう言いながら、木刀で防ぐ。

「まだまだ。」

次は吹き飛ばされる前に足を離してもう一度蹴りを加える。

しかし、それも受け止められてしまう。

それから少し離れてもう一度構え直す。

『次は此方から行くぞ。受け止めて見せろ。』

「よしっ、来い。」

軽めに強化して無駄な動きを無くして突っ込む。

右で握っている木刀を土郎に向けて斬りつける。

土郎はそれを持っている木刀で受け止める。

(ツー！重い。)

まともに受け止めれば信一と土郎では能力に差が出るため、受け止めるのは難しい。

(受け止めるのが難しいなら、受け流すだけだ。)

土郎は信一の攻撃を受け流すことに集中する。

この特訓も信一が土郎が聖杯戦争に首を突っ込むだろうと考えて自分の身を守るように教えたのだ。

サーヴァント相手では気休め程度にしか為らないが、それでも魔術師、そして葛木を、暗殺者を相手にしても戦えることだろう。

後はこいつの成長次第だ。

防戦一方の土郎に信一の容赦ない連続攻撃が浴びせられる。

それを十分間ほど続けて、信一は打ち込むのを止める。

そして信一は構えを解き、木刀を消す。

「どうしたんだよ信兄、まだまだこれからだろう。」

いつもならこんな短時間で終わるはずがない。

それに今朝、桜に今日はみっちりやると言ったのにだ。

そう言う場合は俺がぶっ倒れるまでやるのだが。

『今日はこれで終いだ。明日に備えて今日は寝ろ。』

「わかった、でもストーブの修理がまだ。」

藤ねえが持つてきたストーブの修理が未だに終わっていないかったのだ。

今日中にやらなければならぬと、明日になって冬木の虎が降臨したら身が持たない。

『それくらいは、俺がやってやろう。』

「え、でもそれは」

『かまわんさ。これでもお前の兄だぞ、少しは信頼したらどうだ。』

「ありがとう、じゃあ俺寝るから。」

『ああ、お休み。』

士郎はいつもと何処か違う信一に疑問を持ちながら、寝室へと向かっていく。

その日の深夜、何処の家の住民も寝静まっている頃。衛宮邸の道場では人影があった。

人影の正体は、現在この家の当主でもある衛宮信一だ。

ストーブの修理を終え、道着に着替えて剣を振るっている。

信一が持つている剣は黄金に輝く剣、騎士王が持つていたとされる聖剣。

カリバーン（勝利すべき黄金の剣）を振るいながら精神を集中させている。

『明日から全てが動き出す。この十年間の全てが。アインツベルンを、イリヤを助けるための戦いが。』

俺はまた戦いを始めるのだな、やるしかないだろう。彼女の願いを叶えるためにも。

### 第三章 動き出した運命

S a i d 士郎

「士郎、お前は今でも正義の味方を目指しているか。」  
兄貴からそう言われたのはいつのことだろうか。  
確かあれは親父が亡くなってからすぐのことだったと思う、俺が親父に正義の味方になると告げてから少ししか立っていないので忘れてい

るはずがないのに、何故そんな質問をするのかと思ったが兄貴の顔は何時にもましてまじめな表情だったため不要な言葉は喋らず、質問に

答える。

「当たり前だろう、俺は親父と約束したんだからな。」

「そうか」

俺の言葉を兄貴は微笑みながらそう言った。

「だが正義の味方になっても、誰かから恨まれるかもしれんぞ。」  
兄貴にそう言われて、俺は考えた。

自分を恨むやつをどうするか、そんなこと決まっている。

「だったら、そいつもまとめて救ってやる。」

それを聞いた、兄貴は何処か嬉しそうに笑った。  
きつと予想していたとおりだったんだらうけど。

「なら、お前は全ての者を救う気か」

その質問には悩んだ。

全ての者を救う。俺に出来るのかと。

出も俺の答は決まっている。

「全てを助けられるほど俺は強くない。だけど、身近な人、手の届く

範囲にいる人を救える。そんな正義の味方でいたいんだ。」  
俺のその答に兄貴は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。  
そして少ししてから大声で笑い始めた。

俺はそれが可笑しくて笑われているのかと思ひ、ムツとしたが兄貴はその後こう言った。

『そうか、なら俺はお前を正義の味方に相応しい男に鍛えてやろう。』

そう言った兄貴の顔は優しく微笑んでいた。  
この頃からだろう。

兄貴が俺を鍛えてくれたしたのは。

今日の朝食時。

いつものように、朝食を取っていた時、兄貴がいきなり俺たちに話しかけてきた。

『大河』

「何、信一。」

『すまないが今日は気分が優れないので、学校を休ませて貰う。』  
そう言う兄貴の顔色はいつもより悪いように見える。

確かに昨日の晩から、様子がおかしかったが体調が悪かったとは。

「大丈夫信一。お医者さん呼ぼうか。」

『いや、大丈夫だ。おそらくこの頃休み無しにバイトをしていた所  
為だろう。今日一日休めばすぐに直る。』

そう言うのと立ち上がり、部屋の出口へと向かう。

その足取りはいつものキレはなく、重い鉛のようだ。  
これは相当悪いようだ。

『あ、それと。』

兄貴が部屋の出口に付いた瞬間立ち止まった。

俺たちはどうしたのかと、聞き入る。

『台所に今日の弁当を置いておいたから。登校時に持って行くよう』

に、それと食器の片付けはこっちでやっておくから君たちは気にしない

で行くように。』

そう言つと、兄貴は今度こそ自分の部屋へと帰っていった。

その後ろ姿を見て、桜が心配そうに言った。

「大丈夫でしょうか、信一さん。」

「大丈夫だよ、だって兄貴だぜ。明日にはコロツと直ってるって。そう言っている俺だが、内心は心配でどうしようもない。」

この十年間、こんな事は一度としてなかった。

兄貴はいつも俺の前に立って、俺を引つ張ってきてくれたから。

兄貴が居たから今の俺があるのだと思う。

兄貴が言うには、『俺が居なくともお前ならここまで来ていたさ。』  
そう言ってくれる。

なら、俺はなるべく兄貴に心配を掛けないようにするのが一番だろう。

そう思い、俺達は学校へと向かった。

そして放課後、一成から頼まれていた用具の修理を終え帰ろうとしていたときに、ちょうど部活が終わり帰ろうとしていた慎二に出会った

。

「やあ、衛宮。生徒会へのポイントアップかい。がんばるねえ。」

「そんなものじゃ無いよ。お前は部活帰りか。」

「ああそうだよ、お前が辞めてから張り合いのない奴ばっかになっちゃまったがな。」

そう言つて皮肉を言ってくるのは、俺の親友の間桐慎二だ。

一応、桜の兄だ。何故こんな奴の妹がって思うけど、仕方ないだろう。

それに口は悪いが、根は優しいことを俺は知っている。  
押して言うが口の悪いことでも有名だが。

「そうだ衛宮、ついでに弓道場の掃除もやっとしてくれないか。  
どうせ自分でやるのが面倒なのだろう。」

こいつはそう言う人間なのだ。

「今回だけだぞ。」

断れない自分がかい。

そついやこないだも兄貴から断ることを憶えろと言われたっけ。

俺がそう答えると、慎二はさっさと帰ってしまった。

「さて、俺も早めに終わらせるとするか。」

そう言つて、弓道場へと向かった。

それから俺は弓道場の掃除をやったが終わった頃には既に辺りは暗  
くなっていた。

そこで俺は重大なことに気が付いた。

( 信兄に、遅れること連絡してねえ。 )

俺がここまで焦るのには理由がある。

以前に、連絡も無しに遅れて帰ってしまったときの兄貴の怒りよう  
と言えば言葉で表せないくらいに怒っていた。

その日の訓練はたるんでるとか言う理由でボロボロにされた。

あのときの記憶は今でも鮮明に思い出せる。

相違や今日は二人とも夕飯食べに来ないんだっけ、兄貴は大丈夫か  
な。

あくまで自分より他人の心配をする士郎であった。

しかし、彼の運命を変える戦いの火蓋は既に切られていたのに、彼  
は気付くことはなかった。

キン！！カン！！

「なんだ今の音、まるで金属がぶつかり合うような音は。校庭の方  
から聞こえてきたぞ。」

そう思った士郎は、校庭へと向かって走っていった。

校庭の金網に隠れながら進んでいくと。



校庭で二つの影がぶつかり合っていることに気付いた。

1人は赤い礼装を着ていて、兄貴が使うような双剣らしき武器を持って戦っている。

もう片方は、青い服に朱色の槍を持って戦っている。

青い方の動きは、まさに神速と言ったところで視覚するのがやっとと言っぐらいだ。

しかし、驚くのはもう片方の方だ。赤い奴は青い奴の神速の槍を見事に受け止めている。

最小限の動きで、敵の攻撃を誘導しているのだろう。

その動きが何処か、兄貴に重なって見えたのは何故だろう。

武器が似ているからか。

しかし、二人の動きは人外であっておそらく俺では防ぐのもままならないぐらいだろう。

信兄ならもしかしたらと思っただが、今は寝込んでいるはずだ。

それにこのまま居れば、大丈夫なはず。でも、彼奴等が市街地に出たりしたら。

そう思っただ瞬間、青い方の殺気が一気に増した。

その瞬間、迂闊にも腕が金網に当たってしまい音を立ててしまった。ガシャン！！

その音がした瞬間。

青い方が此方を見る。その目はまさに野獣と言ったところだろうか。そしてその目を見た瞬間悟った。

こいつと戦ってはならない。

そう思うと、無意識のうちに足を強化して校舎内へと走り出していた。

それから何処まで逃げたかわからない、何も考えずに走りたいのだ。

「何とか逃げ切れたか。」

そう言っただち止まり、呼吸を整える。

さすがにここまで逃げれば十分だろう。

そう思ったときだった、後ろから声がした。

「意外と遠くに逃げたな。」

後ろを振り向くと、先ほどの赤い槍を持っていた男が立っていた。

「ここまでよく逃げ切ったが、これで終わりだ。」

そう言っつて、男は槍を土郎に向けて突き出してきた。

「トレース・オン（投影、開始）」

## 第四章 会合する魔術師達

a i d 信一

士郎とランサーが戦い始める少し前、信一は衛宮邸の土蔵にいた。朝言っていた気分が悪いと言うことをみじんも感じさせないようなテキパキした動きで準備を進めていく。

魔法陣を描き、投影で魔力を流し込んだ紙に必要な詠唱を書いていく。

これは自分が使うわけではないが、後で必ず必要になるだろう。

(今頃は士郎が弓道場の掃除をやらされている頃だろう。)

そう考えながらも、準備を進める。

最後に召喚の媒体となる宝具を中心に突き刺し、一応の準備を終える。

『これで一応終わったな。』

そう言って汗をぬぐう。

『やはり慣れないことはするべきではないな。朝からやり始めたのにもうこんな時間だ。』

今日、学校を欠席した理由はこれを完成させる必要があったため、休んだのだ。

しかし、これほど面倒なものと知らなかったのでこの時間までかかったのだ。

途中で、風呂や昼寝を挟んだことは気にしないでおう。

しかし、そろそろ行かなければ士郎がまずい状況に陥ってしまうだろう。

幾ら彼奴を鍛えたからと言っても、サーヴァントに敵うはずがない。受け流すくらいなら出来るかもしれんが、最速を誇るランサー相手にそれは難しいだろう。

助けに言ってやるか、助けなくてもどうせ凜が助けしてくれるのだが、

この戦いの俺に会いに行くのも良いだろう。

この頃、俗っぽくなってきた気がする。

『行くか、答を見つけてない自分を見物しに。』

そう言つて、普段着を着たままの姿で信一はその場から姿を消した。

s a i d 士郎

「トレース・オン」

俺は瞬時に武器を投影した。

俺が投影したのはディフェンダーと呼ばれる武器だ。

ディフェンダーはその名の通り防御に特化した武器で、上手く使いこなせば最強の防御を誇る武器だろう。

俺は兄貴との真剣での戦いの時は基本これを使っていた。

もう一本使っていた武器があるのだがこの相手にはこれが一番良いだろう。

俺は槍使いの攻撃をディフェンダーで防ぐ。防ぐと言ってもただの突きを弾いただけだ。

あくまで今は敵が油断していたからだ。

士郎は全神経を剣に集中させた。

すると、槍使いは構えを解き、嬉しそうな表情をする。

「てめえ、なかなかやるな。見たところ魔術師だな。」

「そうだ。あんたは誰だ。」

「俺か、俺の名はランサー、ランサーのサーヴァントだ。」

ランサー、

サーヴァント、

それを聞いて思い出した。

聖杯戦争。

確か、兄貴がいつか言っていたような気がする。

魔術師同士の殺し合い、それが激化すれば一般市民にも被害が及ぶかもしれない。

兄貴が言ったその言葉を思い出す。

させない、俺の大切な人達は傷つけさせない。

俺は一気に闘志を上げていった。

体を強化して身体能力を上げ、目を強化して敵の動きに反応する。

兄貴に習ったディフェンダーの使い方通りではなく、敵の攻撃に  
じて対応していく。

わざと隙を作ってはそこに攻め込ませては、ギリギリで防ぐ。

そんな綱渡りの戦闘を続けていく。

「いいぜ、もつとスピードを上げていくぜ。」

そう言つと、ランサーの攻撃速度が更に増してきた。

それでも何とか、受け流していく。

このまま行けば、兄貴が来るまで持つかもしれない。

そう思つたその時だった。

後ろに気配を感じた。おそらく先ほどの奴が来たのだろう。

後ろに意識が行つたのはほんの一瞬。

その一瞬が命取りとなった。ランサーの槍が士郎のディフェンダー  
を弾き飛ばす。

再度投影しようとしたが、しかし間に合いそうにもない。

「トレー」

「終わりだ小僧。」

ランサーの槍が士郎に迫る。

この距離なら絶対にかかせない。

この場にいるもの全員がそう思つたその瞬間。

ガキーン！！

一本の矢がランサーの槍を弾いた。

この場にいる者の視線が矢が飛んできた方に集まる。

そこには、窓枠に立ち士郎の普段着の色違いを着て、弓を片手にこ  
つちを睨んでいる衛宮信一の姿があつた。

「てめえ、何者だ。」

ランサーの苛立つた声が響く。

兄貴はそれを気にした様子もなく答える。  
「私か。私はそこにいる未熟者の兄だよ。」  
未熟者と呼ばれたことに対する虚しさど、何故ここに、と言つ疑問が浮かんだ。

s a i d 凜

予想以上だった。

これがサーヴァント同士の、英雄と言われた者同士の戦いなのだと。ランサーは朱い槍を神速の如き動きで使いこなし。

アーチャーは双剣を持ってそれを受け止める。両者は目で追うのがやっとと言つぐらいの速さで動いている。

おそらくこれでもまだ本気では無いのだろう。

迂闊にもその動きに見入ってしまった。

だから気付かなかった、残った生徒がいたことなんて。

ガシャン!!

金網に何かが当たる音がした。

全員がそちらの方を向く。

そこには1人の生徒がいた、暗闇で顔は見えていないが、その生徒は此方が気付いたことに気付くと校舎内へと走っていた。

それを見たランサーが、

「勝負はお預けだ。あばよ。」

そう言うと、ランサーはその生徒を追っていった。

私はそこで気付いた、アーチャーが追いかけていっていないことに。

「何であんたもここにいるのよ、さっさと追いかけなさいよ。」

「そう言われても、そんな指示は受けていないのでね。」

その時思った、こいつわざとだ。

しかし、そんなことを気にしている時じゃない。

「アーチャー、追うわよ。」

そう言つて私も駆けだしていった。

このとき私は焦つていたんだと思う、だつて自分で走るよりアーチャーに運んで貰つた方が早いに決まっているからだ。相変わらずの、うっかり癖だ。

「何で、こんな時間に人が残っているのよ。」

私は走りながらそんな愚痴をこぼしていた。

そんなときアーチャーが話しかけてきた。

「凜、君は無駄なことをしようとしている。」

「何だよ。」

その言葉の意味がわからず、聞き返す。

「一般人が死ぬのは仕方ないことだ。これは戦争なのだからな。しかし、君はそれを助けようとしている。」

そう言われて、引き下がる私ではない。

「関係ないわ、私は見捨てるのがだいつ嫌いなものよ。」

そう言つて階段を上がり、廊下に差し掛かったところで私は金属同士がぶつかり合うような音を聞いた。

この先だ、そう思つて行つたら。

案の定ランサーと先ほどの生徒がいた。

ただ、予想外だったのはその生徒がランサー相手に戦っていることだった。

ランサーが本気でないにしろ、サーヴァントとまともに戦える人間が居るだなんて。

しかし、彼は此方に気付いたのか、一瞬此方を見ようとしたがその隙を見てランサーがたたみ掛けた。

彼の剣が飛ばされる。そして、ランサーの槍が彼に迫る。

「トレー」

「終わりだ小僧。」

しかし、その槍は彼に届くことはなかった。

ガキーン！！

どこからか放たれた矢が、ランサーの矢を弾いたのだ。

私たちの視線が放たれた方に集まる。

そこには、弓を片手に窓枠に立っているのは、衛宮兄弟の兄、三年の衛宮信一だった。

「てめえ、何者だ。」

ランサーが苛立ちを隠さずに言う。

すると衛宮先輩は、苛立った言葉に対して気にとめず。

「私か。私はそこにいる未熟者の兄だよ。」

その姿が何故か、アーチャーに重なって見えた。



#### 第四章 会合する魔術師達（後書き）

感想をお願いします。

## 第五章 激突サーヴァント

s a i d 信一

強化した足で跳躍して、学校の敷地内に着いた。

そこから千里眼で校舎内を覗いてみるとそこには、予想していたとおりには士郎とランサーが居た。

そして少しすると、凜達もやってきた。

その時、士郎が凜達に気を取られて一瞬の隙が出来てしまった。

それをランサーが槍を突き刺すために槍を引く。

『トレース・オン（投影・開始）』

その時私は、強度を高めた威力のある矢を投影して一緒に投影した弓で放つ。

その後俺は、窓枠に立ち彼らを眺めた。

俺が放った矢は見事にランサーの槍を弾いた。

その瞬間この場の視線が此方に集まった。

ランサーは相変わらず獣のような目をしている。

士郎は俺が来たことに困惑しているようだ。

その後方にいる凜は、俺を睨んでいる。俺が何かしたか？

そして、アーチャーこと、エミヤシロウは俺を困惑したような目で見ている。

それはそうだ、自分の記憶にない人物が現れては困惑しないはずがない。

「てめえ、何者だ。」

その中でランサーが苛立った声で聞いてくる、この時間にその声は迷惑なのだが、それに対して私は気にとめずに答える。

『私か。私はそこにいる未熟者の兄だよ。』

そう言っただけランサーと、睨み合ったが、すぐに目をそらした。

私には、男と見つめ合う趣味はないからな。

それが気に食わなかったのか、ランサーは此方に向けて槍を構える。  
「まあ、兄弟一緒にあの世に送ってやるよ。」  
そう言うと、此方に突っ込んできた。

私はそれを冷静に見て、どう動くか考える。  
敵の状況は獲物を見つけた獣。

彼の性格からしてこの一撃は、おそらく様子見と言ったところか。  
だが、此方はあまり時間を掛けるわけにはいかないのだよ。

「死ねえ」

ランサーが槍を思いっきりのばす。

その槍は信一に向かって真っ直ぐと進んでいく。

信一はそれを伏せることで回避する。それもギリギリのタイミング  
でだ。

その為、一瞬の間が今度はランサーに出来る。

それを見逃さずに、強化した足での蹴りをランサーの顎にヒットさ  
せる。

「グア!!!」

予想以上の蹴りの強さにランサーが吹っ飛ばされる。

吹っ飛んだランサーは土郎の向こう側に着地した。

立ち上がったランサーは此方をキツと睨みつける。

その口からは血が流れ出ている、おそらく口の中を切ったのだろう。

「てめえ、本気で何者だ。サーヴァントである俺にダメージを与え  
るなんてよ。」

その言葉に凜は驚いた、幾ら力が強かろうが普通の状態のサーヴァ  
ントに傷を負わせるのは不可能だ。

魔力供給が無くなったサーヴァントなら別かもしれないが。

しかし彼はどうだ、魔力供給が完全に行われているランサー相手に  
ダメージを与えた。

『だから言っているだろう、私はそこにいる未熟者の兄だと。』

「言う気はねえってことか、良いぜ。それならこっちも本気で行く  
ぜ。」

そう言うと、ランサーからかなりの殺気が溢れ出してきた。

「嘘、今まで本気じゃなかったって事。」

凜は無意識にそう呟いていた。

しかし、それを聞いても信一の表情は変わらない。

『私としてはそれは遠慮しておきたいのだが。』

「断る。」

『やはりそうか、なら。』

どうやら交渉は決裂したようだ。

まあ、元々成功する確率は微塵もなかったわけだが。

私はそうとわかると、懐に忍ばせておいた物を取り出す。

『士郎、目をつぶれ。』

それを言った瞬間に私は手のひらサイズの球体の物を投げる。

それは、ランサーの目の前に来た時点ですさまじい光を放つ。

「くっ。これは、閃光弾か。」

ランサーがそう言うのが気付いたときにはもう遅い、私は呆気にとられていた。士郎を掴むと足早にその場を去る。

ここからは時間との戦いだ。

ランサーが目を開くと、二人は既に何処かに行っていた。

しかし、現在移動している魔力をたどれば簡単に追跡できる。

「ぜってえ逃がさねえ。」

ランサーは、二人を追うためにその場を去った。

信一は現在士郎を脇に抱えて、町中を移動している。

住宅街の屋根と屋根を踏み台にしながら移動しているため、高さが半端じゃない。

その途中で士郎が「高い。」など言っていたが、今は此方も余裕がないため気にせず突っ走る。

既にランサーも追ってきている、今はまだ離れているが話でもしていたら追いつかれてしまうだろう。

そうなればお荷物がある此方の不利だ。  
せめて家まで逃げないと。

『見えた。』

衛宮邸まで後、百メートルと言ったところか。

このまま行けばギリギリ間に合うな。

それからほんの数秒後に衛宮邸の庭にたどり着く。

『士郎、これから土蔵であることをやって貰う。』

『あること？』

信一の言葉が理解できずに聞き返す。

『そうだ、中に入れば私が準備をしていた物があるはずだ。後はそれに従ってやればいい。』

『わかった。』

『なら、上手く着地しろよ。』

『え？』

『そら』

私は有無を言わせずに士郎を土蔵に向けて投げ飛ばす。

『うわあああああ』

士郎は情けない声を上げて吹っ飛んでいくが、こんな時の対処法は学ばせてあるため上手く着地して土蔵へと走っていった。

『さて、邪魔者は消えた。此方も開演と行こうか。セタンタ。』

信一が振り向きながらそう言っていると、家の塀に先ほどのランサーが立っていた。

ランサーは朱い槍を持って、此方を睨んでいる。

「てめえ、何故俺の真名を知っていやがる。まあ良い、魔術師ごときが戦えるのならな。」

ランサーはそう言っていると、庭に降り立つ。

信一は士郎が向かった土蔵を守るように立つ。

『その魔術師に蹴り飛ばされたのは誰だったかな。』

そう言っているとランサーが、怒りの表情を表す。

朱い槍を構えると、名乗り始める。

「真名を知っているなら関係ねえな。我が名、ランサーのサーヴァント、クー・フリーン。我が槍を持って押し通る。」

『ならば此方も名乗ろう。我が名、魔術使い、衛宮信一。我が魔術を持って君を打ち砕く。』

「魔術師ではなく、魔術使いか。おもしろい、その心臓、もらい受ける。」

そう言うとランサーが槍を持って此方に突っ込んでくる。

その速さは、さすが最速のサーヴァントと言うところだろう。

だが、このまま倒れる気は全く無い。

信一は手のひらに魔力を込める。

『トレース・オン（投影開始）』

信一の手には二本の剣が現れる。

『行くぞランサー、ルーンの貯蔵は十分か。』

「ほざけえ」

ガキーン！！

キーン！！

ガァン！！

両者の武器がぶつかり合う。

両者の間に既に言葉はいらぬ。

語るのは己の武器のみ。

s a i d 土郎

土蔵へと向かった土郎は、まず中に入っている紙を見つけた。

信一の字で書かれている物だとすぐに解った。

その紙によれば、

「えーと、これを詠唱すればいいのか。」

そこに書かれてあるのは何かの魔術の詠唱だとわかった。

そして更に、土蔵の中に描かれてある魔法陣を見つける。

後はこれに向けて、詠唱をすればいいらしい。

ガキーン！！

キーン！！

カァン！！

外では金属がぶつかり合う音が聞こえてきた。

幾ら兄貴が強くても、相手があれじゃあ分が悪すぎる。

いらぬ心配をしながら士郎は詠唱の準備を始めた。

「よし、やるぞ。」

そう言つて、紙に書かれてある呪文を詠唱し始める。

「素に銀と鉄。礎と石の契約の大公。祖には我が父、衛宮切継。」

s a i d o u t

「ハア！！」

ギーン！！

信一と干将莫耶とランサーのゲイ・ボルグがぶつかり合う。

両者とも一歩も引かない動きで、戦つていく。

「素に銀と鉄。礎と石の契約の大公。祖には我が父、衛宮切継。」

その声が聞こえてきた。どうやら向こうもやっと始まったようだ。

その声は、ランサーにも届いていたようで動きを止め怪訝な顔をしている。

「てめえ、あの小僧に何をさせる気だ。」

『さあ、なんだろうな。』

そう言っているときまた士郎の音が聞こえてきた。

「降り立つ壁には風を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に居たる三叉路は循環せよ。」

その言葉を聞いて、ランサーがハツとしたように顔を上げる。

「まさかてめえ、サーヴァントの召喚をさせるつもりか。」

やっと気が付いたか、だがもう遅い。

あそこで士郎を殺さなかったことを恨むんだな。

『悪いかね、あれでも魔術師だ。サーヴァントぐらい呼べるぞ。』

「チツ。なら、てめえを倒して止めさせるだけだ。」

その言葉を体現するかのように、槍の速度が更に増した。

この速度はかつての自分なら受け止めるのは、難しいところだっただろう。

しかし、私もこの十年間何もしなかったわけがない。

鍛錬に鍛錬を重ね、暇さえあれば外国で戦いを重ねていた。

何故か、魔道元帥の趣味で異世界にも飛ばされたことが有ったし。

だが、そのお陰で私自身も強くなった。

『させんさ。私の名にかけてここは通さん。』

そう言つて、再度ぶつかり合う。

土蔵で走ろうが詠唱を続ける。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつど五度。

ただ、満たされる刻を破却する。」

その詠唱に合わせて魔法陣に光が灯り始める。

そして魔法陣の中心にある黄金の剣も光を放つ。

『どうやら、そろそろ詠唱も終わるみたいだな。どうする。』

士郎の詠唱がそろそろ終わることに気が付いてランサーに向けて言う。

そう言つと、二人はいったん離れる。

「チツ、だったら貴様だけでも葬り去るか。」

『出来ると思つているのかね。』

「あまり俺をなめるなよ。」

ランサーがそう言つと、ランサーが持つ槍が更に朱く光り出してきた。

それを見て信一はわかった。ランサーが何をするのかを。

ここで、宝具を使ってくるか。なら、此方も対抗するしかないな。

そう決心すると、信一は干将莫耶を消して弓を取り出す。



『此方も本気の一撃を撃つしかないな。』

「————— Anfa gu」

「————— 告げる」

「————— 告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

ランサーの槍は周りの風を巻き込み、圧倒的な存在感を醸し出している。

しかし、その魔力は優に1人の人間を殺せるだろう。

直撃でもすれば、即死は免れない。

「行くぞ小僧、貴様の心臓もらい受ける。」

そう言つて突撃してくる。

信一はそれを見て、上にジャンプする。

しかし、それも織り込み済み。

「甘い、その程度で俺の槍をかわせると思うなよ。」

すぐにランサーは、上に向けて槍を傾ける。

しかし、信一も黙つてやられるわけにはいかない。

「I am the bone of my sword.」

——我が骨子は捻れ狂う。」

信一の魔術回路に一気に魔力が流れ込む。

その詠唱に合わせて、矢を一本投影する。

「誓いを此処に。

我は常世総じての善となる者、

我は常予想時ての悪をしく者。」

その矢は、まるで剣のような形をしていて、形状も螺旋状になっている。

どちらかと言うと、矢より剣に近いだろう。

「おもしれえ、それがためえの本気か。」

『さあな。少なくとも力は抜けんよ。』

両者の間に魔力が高まる。

魔力と魔力がぶつかり合う。まるでそれは神話の世界の話のようだった。

「汝三大の言霊を繕う七点、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よー！」

その詠唱が完成した瞬間。魔法陣、黄金に輝く剣を中心に土蔵が光で包まれる。

「うわ。」

士郎はあまりのことに、後ろにこける。

そして魔法陣の中から1人の少女が出てくる。

ただ、少女と呼ぶには相応しくない雰囲気、覇気を出していた。

その光は信一達にも届いていたが、2人は止まらない。

「受けてやるぞ、小僧。必殺の槍を。」

『フツ、それすらを打ち砕いてやるう。』

ランサーの槍が一気に赤く光。

それに対して、信一の持つ矢も形状を変え、光を放ち出す。

「ゲイ（刺し穿つ）」

『カラド（偽）』

少女は士郎の方を見つめ口を開く。

「サーヴァント、セイバー。」

少女はまるで人形のように綺麗で、とても美しかった。

「召喚に従い、参上した。」

いきなりの事に驚きを隠せなかった。

「問おう、貴方が私のマスターか。」

「ボルグ（死棘の槍）」

「ボルグ（螺旋剣）」

朱い槍と螺旋の剣がぶつかり合う。

ゴオオオオオオオオ！！

## 第五章 激突サーヴァント（後書き）

これで一応投稿は終了します。

一応次回の「セイバーVSランサー」は書いていますが感想次第では投稿します。

まずは報告を読んで、感想をお願いします。

## 報告続

前回報告で感想で存続させて欲しいという声が多かった方が連載されると言いましたが。

お気に入り数が多い場合でも感想の声次第ではお気に入り数が少なくても連載するかも知れません。

その為感想の程を何とか宜しくお願いします。

さらには明智家 天下統一への道の主人公明智光慶を聖杯に導かれし者に出せと言うような感想が来ればそれも検討します。

逆は難しいですが何とか頑張りたいと思います。

何はともあれ八月十日までが期限ですので八月十一日になってから届いたものはカウントしませんので。其処の所は宜しくお願いします。

## 途中経過

八月三日までに皆様から届いた感想にの数は七つも来ました。その内三つが継続を希望する者です。と言うわけで、現在の途中経過をお伝えします。

明智家 天下統一への道

一票

聖杯に導かれし者

一票

このような結果となつていますがまだ七日間ありますのでどんどんお送り下さい。

しかしこの二つを掲載して分かったことはFateファンが多いと言ふことですな。

このサイトを見つけてから一ヶ月ほどしか経っていませんが友人を含めてFate作品がどれだけ知られているかがよく分かりました。とりあえず期限間十日までですのでそれ以降は向こうとさせていただきますので其処の所をお間違えなく。

## 途中経過（後書き）

多くの感想をいただいておりますが、やはり自身の知識不足を思い知らされます。

一応次はバーサーカー戦ですが其処までは原作ストーリーを辿ると思います。

その次に原作では現れなかった敵、つまりは信一の敵が現れます。そこから新たなストーリーを作り上げたいと思いますので今しばらく原作介入をお楽しみ下さい

## 結果発表

八月十日までのアンケートの結果が出ましたのでその報告と今後の活動について記しておきたいと思えます。

結果は聖杯に導かれし者がなんと十票。

明智家天下統一への道が四票という結果になりました。

この結果をもちまして今後聖杯に導かれし者を定期的に連載したいと思えます。

明智家の方は不定期的に連載したいと思っております。

一応両方とも終わりまで行かせるつもりですのでご愛読のこと宜しくお願いいたします。

とりあえず今日、最新話を両方とも掲載するつもりです。



## 第六章 サーヴァントセイバー

二人の攻撃で起きた衝撃は土蔵にいた二人にも届いていた。おそらくランサーと兄貴が本気の一撃を出したのだろう。

そっだ、兄貴が危険だ。そう言おうと思った瞬間。

「マスター、この剣は？」

先ほどセイバーと名乗った女性が尋ねてきた。

「それか、それは兄貴があんたの召喚に必要だつて。」

それを聞くとセイバーはすこし驚いたような表情をしてその剣を引き抜く。

「マスターはここから出ないでください。」

そう言うと、セイバーと名乗った女性は剣を持ったまま土蔵を飛び出していった。

その時庭では、ランサーのゲイ・ボルグと信一のカラド・ボルグが鬨ぎ合っていた。

両者の攻撃はほぼ互角、もしくはやや信一が不利だ。

そして、その差が少しずつだが出来はじめていた。

始めは互角だったせめぎ合いが、すこしずつだがランサーの槍が信一めがけて迫ってきているのだ。

信一も空中で魔力を放ちながら、何とか保っているが打ち破られるのは時間の問題だろう。

ならば、あれを使うか。

信一がそう思ったときだった、あの聞き慣れた声が聞こえたのは。

「ランサー!!!」

その雄叫びにも似た声は、聞き間違えるはずもない声。

自分の生きる道を決定づけた戦いで助けてくれた最愛の女性。

その声の主はランサーに斬りかかる。

ランサーはそれを、ゲイボルグを捨てる形で回避することに何とか成功する。

そのため、カラドボルグは地面に突き刺さった。

「チツ、小僧。勝負はお預けだ。」

「余裕があるなランサー、サーヴァントを前にして他人と話す余裕があるとは。」

そう言うと、セイバーはランサーに斬りかかる。

ランサーは先ほど捨てたゲイボルグを手元に移動させることで何とか防御する。

さすがのランサーも見えない剣では相手が悪すぎる。

どうやらセイバーは、私が投影した剣を使っているらしい。

しかし、久しぶりに会うところも嬉しいものなのだ。

見とれている場合ではないな。

「セイバーよ、私が後方で援護するから、前衛を任せられてはくれんだろうか。」

それに対してセイバーは簡単に答えた。

「良いでしょう。援護は任せます。」

そう言うと、セイバーは此方に目もくれずにランサーに向けて、斬りかかった。

信一は簡単に信じすぎだろうと、疑問を持ったが。

すぐに弓を構えて、援護する形にはいる。

「トレース・オン」

矢を五本ほど投影して、信一も移動しながら矢を放つ。

キンーン！！

ガキン！！

セイバーの見えない剣に、ランサーは苦戦をしていた。

セイバーの予想以上の速さにも相まって、防戦一方な展開になってきている。

「くつ。卑怯者め、自らの武器を隠すとは何事か。」

ランサーはそう言うと、槍を突き出すように構えてセイバーの動きに備える。

セイバーはそれに答えることなく、不可視の剣で斬りかかる。

ランサーはそれを何とか受け止めるが、苦戦をしていることは間違いない。

セイバーの一撃を防いだが、後ろに飛ばされる。

「どうしたランサー、止まっただけでは槍兵の名が泣こう。」

そちらが来ないのならば、此方から行くが。」

その挑発じみた言葉にランサーは苛つきながら問いかける。

「その前に一つだけ聞かせろ。貴様の宝具、それは剣か。」

その問いにセイバーはフツと笑い答える。

「さあな、斧剣、槍剣。いや、もしくは弓と言うこともあり得るかもしれないぞ。」

「ぬかせ、セイバーが。」

ランサーはそう言うと、もう一度信一に見せた動きをする。

しかし、信一がそれを黙って見ているはずがない。

「チツ」

ランサーが舌打ちして、後ろに飛ぶと先ほどまでランサーがいた場所に矢が振ってくる。

『どうしたランサー、私を忘れて貰っては困るぞ。』

信一が、セイバーと直線から離れたところから弓を構えていた。

「チツ。1人でも面倒なのに、二人掛かりとは。」

『それでも私は小心者でね、こうでもなければ戦えんのだよ。』

そう言うともた矢を投影して弓を引く。

それに気を取られていると、セイバーがまた斬りかかってきた。

「くっ！！」

ランサーはそれを防いで持ち直す。

セイバーとランサーは睨み合い、両者の出方を待つ。

## 第七章 サークヴァント同士の決闘

先に動いたのは、セイバーでもランサーのどちらでもなかった。

『弓だけが援護ではないぞ。』

信一が干将莫耶を持ってランサーに斬りかかったのだ。

ランサーは全く予想していなかったので、吹っ飛ばされる。

「これで、決める。」

セイバーはそう言ってランサーに斬りかかろうとしたが、

『セイバー後ろに下がれ。』

その声を聞いて、信一の所まで下がる。

しかし、下がらせた理由がわからないので、質問しようとする。

「貴方は、何故。」

そう言われると信一は、フツと笑って魔力を込める。

『何故って、こうするためだよ。』

そこでセイバーは気が付いた、ランサーは今先ほど彼が放った矢が集まっている所に立っている。

『ブロークン・ファンタズム（壊れた幻想）』

そう言った瞬間、信一は地面に刺さっている矢に向かって一気に魔力を流し込む。

そして、矢は流し込まれた魔力に耐えきれずに膨張して、カラドボルグを中心に爆発を起こす。

あのまま斬りかかっていたら爆発に巻き込まれていただろう、そしてあの爆発の威力だ。

まず、無傷にはいられないだろう。

今持っている剣と言い、この爆発と言い、この人は一体何者だろうか。

セイバーがそんな疑問を思っているとき、信一が口を開いた。

『参ったな。逃げられたようだ。』

その言葉を聞いて、セイバーがランサーの方を向くとそこには既に

誰もいなかった。

おそらく先ほどの爆発に巻き込まれて逃げたのだろう。

それを、見計らったのかマスターが土蔵の中から出てきた。

「ゲツ、なんだよこれ。ボロボロじゃないか。」

士郎はひさんな状況になった庭を見ながらそう言った。

たしかに、庭は彼方此方が凸凹していたり、焦げ後などが目立っている。

感傷に浸っていると、セイバーが剣を構えて言った。

「マスター、下がっててください。またサーヴァントが来ます。」

そう言っつて、跳躍しようとしたらセイバーを信一が掴んでいた。

「どうしたのですか。此処で迎撃してはマスターに危険が。」

『いや、これでも自分の身ぐらいは守れる。それに此処でならこの家の結界と私の援護も出来てやりやすい。』

「わかりました。」

そう言っつとセイバーは渋々ながらに此処で戦うことを了承してくれた。

『そう言えば自己紹介がまだだったな。私はこの未熟者で君のマスターの兄の衛宮信一だ。』

信一が思い出したように呟いた。

「俺は、衛宮士郎だ。マスターじゃなくって士郎って呼んでくれ。」

それに乗っかって士郎も自己紹介をする。

「私の真名は言えませんが、セイバーと呼んでください。」

セイバーも自己紹介を終えた所で凜達がやってきた。

セイバーが斬りかかろうとしたが止めておいた。

『此処の結界が反応しなかったって事は、向こうに敵意はないようだ。話でも聞いても損はないと思うぞ。』

そう言っつとセイバーは、剣は納めないがその場に立つたままだ。

## 第八章 会合する魔術師 前編（前書き）

モニターを破壊する（された）事件がありましたので更新が遅れて  
しまいました。  
誠にすみません。

## 第八章 会合する魔術師 前編

「あら、そんなに簡単に信頼して良いのかしら、衛宮先輩。」  
アーチャーをつれた凜が話しかけてくる。

『なに、此処で戦っても負ける気はないだけさ。遠坂。』  
凜は信一が此方を見らずに、そう言ったことに驚きながら言葉を続ける。

「あら、どうして私ってわかったの。」

士郎とセイバーが呆気にとられているのを脇目に信一は答える。

『それは簡単だろう。この土地で魔術で有名なのは遠坂と間桐だ、間桐のワカメがこんなに積極的にやってくるとは思わないからな。』

そうなれば後は必然的に遠坂になるって訳だ。遠坂の跡取りはお転婆で勝ち気だからな。学校では猫をかぶっているようだが、完全に隠し切れていないからな。』

サラリと慎二のことを侮辱しているように聞こえてきた。

「わかったわよ。」

そこまで言つと、凜が遮る。

どうやら話が脇道に逸れていたようだ。

此処でやつと信一は、凜の方を振り向く。

後ろで、声が聞こえるがそれは気にしないでおこう。

『それで、何か用かね。』

「ええ、率直に聞くわ。貴方がその娘のマスター。」

『そうだと言ったら。』

「そ、それは。」

此処で、凜が黙る。

先ほどのランサーとの戦いで見せた動き、そして向こうにはサーヴァントが居る。

おそらくセイバーなのだろう。

幾らアーチャーを信頼してるからって、これでは無理がある。

しかし、そんな心配は信一の一言によって消え去ることになる。

『フツ。残念ながら私はマスターではない、彼女のマスターはこの未熟者だ。』

そう言つて、士郎を指さす。

じゃあ今考えていた、最悪の状況つて全くの無駄。

そして、からかわれていたことに気付くと腹が立ってきた。

「あんたねえ。」

そう言つて、信一に向けて人差し指を出してガンドを放とうとする  
と。

信一と凜の間にセイバーが入り込んでくる。

セイバーは剣を此方に向けて構えている。

その目はこれ以上は容赦はしないと語っている。

それを見て渋々腕を降ろす。

それを見て、信一がフツと笑う。この展開を呼んでいたようだ。

つまり完全に此方が遊ばれていたのだ。

セイバーにそんな気は全くないだろう、つまりはセイバーの性格を利用した作戦だったのだ。

それに気付くとまた腹が立ったが、今度こそセイバーが斬りかかってくるだろうから止めておく。

「信一、今は遊んでいるときではないのでは。」

セイバーに言われて信一は、そうだな、と言つ。

『話すなら中ではないか、お茶を出そう。』

そう言つと、信一は家に向かって行つた。

それに続くように、士郎が行く。その後ろにセイバーが続く。

しっかりとセイバーに後方を任せている所が、彼の用心深さを思わせる。



## 第九章 会合する魔術師 後編

居間には、士郎、信一、セイバー、凜、アーチャーの五人が居る。ただし、アーチャーは霊体化しているため姿はない。

残った四人は信一が入れたお茶とお菓子の乗ったテーブルの前に座っている。

セイバーはお茶を飲みながらお菓子を食べている。

ちなみにこのお菓子も信一が作った物だ。

士郎の隣にセイバーが座り、その正面に凜が座っている。

沈黙と化したこの状況で最初に口を開いたのは信一であった。

『それで、話とは何かな。』

そう言われると凜は口を開く。

「ええ、まず聞きたいことがあるの。」

『ほう。良いだろう、話せる範囲でなら話してやろう。』

その言葉を聞いて士郎は思った。

兄貴、口調が昔に戻ってる。

「衛宮先輩。貴方は、魔術師ですか。」

そう言つて凜は信一の方をじつと見つめる。正確に言つと誤魔化すんじゃないぞという風に睨んでいるのだが。

あいにくそんな睨みは、信一に効くわけがない。

この程度の小娘の威圧などこれまで味わってきた地獄のような日々には比べたらどれだけ楽だろうか。

死徒との戦い、青崎姉妹の大喧嘩を止めたりなど、あれは死ぬかと思つた。

志貴さんと協力しなかつたら絶対に無理だつただろう。

おつと話の論点がまたずれていたな。

『敵になるかもしれない相手に、此方の情報を教えるだけでも。』

「お言葉ですが、この冬木の地は魔術協会の監視下にありますが、それに遠坂はこの地のセカンドオーナーでもあります。この地で生活

する魔術師について調べる義務があります。」

そう言った凜の顔は勝ち誇った顔であった。

どんな命知らずでも、魔術協会にケンカを吹っ掛けるような真似はしないだろう、普通はな。

『それがどうかしたのか。』

「は？それがどういいう意味を持つが解って御出ですか。」

『あいにく我が父、切継を始めに。衛宮家は魔術協会とは縁がないのでね。』

切継が魔術協会から一目置かれている理由は、その戦闘方法だ。

衛宮切継は他の魔術師が絶対に使わないような武器を使う。

それは銃という近代兵器だ。その為、他の魔術師から嫌われていたのだ。

「それは協会と対立すると言っことですか。」

『さあ、少なくともこの聖杯戦争でセカンドオーナーという権力を用いて、敵の情報を聞き出すのはアンフェアではないのかね。』

そう言うと凜は、ムツとしたが確かにそうだ。

今は戦争をしているのだ、そして今自分は敵の結界の中。

戦力的の此方が絶対的不利だ。

悩んでいた凜に助け船を出したのは、意外な人物であった。

「兄貴、聖杯戦争ってなんだ。昔、兄貴が言ってた様な気がするけど。詳しく聞いて無くて。」

士郎の言葉で凜はハツとなった。

その話をしに来たというのに、何を相手のペースに乗せられていたのか。

『そう言うのは、遠坂に聞け。私はお門違いだ。』

そう言うと信一は鼻で笑うような顔をして、セイバーにお茶を注ぐ。その時凜は悟った。この男、絶対わざとだ。

しかし、セイバーの前で戦闘行為は厳禁だろう。

「いいわ、まずは衛宮くんがセイバーのマスターで良いのね。」

「えっと、そうなるのかな。マスターが何なのかは知らないが。」

それを聞いて凜は一番驚いた。  
聖杯戦争を知らないでマスターになったのかと、その上セイバーまで引き当てたと。

俄然苛ついてきたがそれを悟られないように話す。

「簡単に言えば、貴方はあるゲームに巻き込まれたの。」

「ゲーム？」

「そう、七人のマスターが殺し合う聖杯戦争に。」

「聖杯戦争？殺し合い？」

それを聞いて士郎はハツとなった。

先ほどのランサーとの戦い。

あれがサーヴァント、あんなのが七体もいるって事か。

そんなのが戦い合ったら、一般市民に危険が。

『その通りだ士郎。現に一昨日のガス爆発はサーヴァントによる物だ。』

「なっ。」

「ええそうよ。それはともかく、どちらかの腕に聖痕があるでしょ。

それが霊綬という物よ。」

士郎はそれを聞いて左腕に描かれてある、霊綬を見る。

「それがマスターの証よ。何十年に一度、七人のマスターが殺し合うの。」

「それが聖杯戦争。」

「そうよ。詳しい話は監督役に聞きましょう。」

そう言つと凜は、席を立つ。

「監督役？」

「そう。この聖杯戦争を監視する役割を担う者ことよ。監督役は協会に在るから今から行きましょう。」

そう言つと凜は、玄関へ向かっていった。

士郎もそれに続いて行こうとすると、信一が呼び止める。

『士郎、もしこの戦いに参加するというのがなら。それ相應の覚悟を決めろ。』

そう言つと信一は、庭に向かった。

## 第十章 最凶のサーヴァント

s a i d 信一

協会で士郎が新たな決意を固めた、帰り道。

信一は、出会うべき人物を待っていた。信一は士郎達から離れたた所で待機している。

それは、凜と士郎が話しているときだった。

「これで義理は果たしたわ。」

「遠坂つて意外と良い奴なんだな。」

「はあ、おだてたつて手は抜かないわよ。」

私はその会話を聞きながら、周りの気配を探っていた。

そうすると、無視できないほどの存在感を持った気配を感じた。

それと同時にセイバーが二人に言った。

「士郎。」

二人がその声に反応してセイバーが構えている方を向く。

すると、そこには士郎があったイリヤと、それを守るように立っているバーサーカーの姿があった。

どれだけこの時を待っただろうか。

あのとき救えなかった妹。

敵として出会い、そして守りきれなかった存在。

「こんばんわお兄ちゃん、こうして会うのは二度目だね。」

イリヤを救うためにこの十年間、自分を痛め続けてきた。

信一は懐に入れていた宝石を握りしめる。

その中でも信一はこの状況下で冷静に分析をしていた。

現在は士郎達もイリヤも此方の存在に気付いてないはずだ。

このまま言っても士郎がボロボロになるだけですむのだが、なるべくイリヤには自重して貰いたい。

やるとしたら一発で決めるべきか。

それも奇襲で、イリヤを傷つけずに。

「初めまして凜。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。そう言えば解るでしょ。」

「アインツベルン。」

凜は驚いたように呟いた。

仕方ないだろう、アインツベルンと言えば遠坂、間桐と並んでの御三家の一つだ。

ホムンクルスの製造でも有名な家系だ。

そして、聖杯の抛り所でもあるがこのことは凜達は知らない。

「もう良いよね。どうせ此処で死んじゃうんだし。」

そう言う俊郎達が息をのみ、バーサーカーに備える。

「やっちゃんえバーサーカー。」

「ー」

イリヤの命令にバーカーは、その巨体からは想像できないほどの跳躍を見せて三人に斬りかかる。

幾ら士郎が鍛えられていると言っても、あくまで人間だ。

バーサーカーに勝つのはまず無理だろうこの中でバーサーカーに抗できるのは、

「ハアアアア！！」

セイバーが不可視の剣を持ってバーサーカーに向かう。

両者の剣がぶつかり合う。

セイバーの不可視の剣にバーサーカーはバカでかい岩石剣で戦う。

両者の剣はぶつかり合い火花を散らす。

セイバーは動き回りバーサーカーを相手にスピードで対抗する。

その判断は正しいだろう、幾ら最優のサーヴァントといえども、最凶のサーヴァントを相手にするのは難しいだろう。

しかし、バーサーカーは持っているバカでかい岩石剣を振るいそれを受けるだけではなく、斬り合う。

「あんなバカでかい剣を玩具みたいに。」

凜が驚愕の声を出す。

「はは、やつちやえやつちやえ。」  
イリヤはそれを見て、純粋な子供のように笑いながら言う。  
それを見て信一は胸が苦しくなった。

直接的な関係はないものの、自分たちの所為でこの戦いに身を置くことに。

それは自分の所為ではないと知っていても、やりきれない気持ち  
が渦巻く。

セイバーはバーサーカーの剣を避けるために電柱や電線を伝って移動して行く。

バーサーカーはそれを地を蹴りながら追いかける。

雄叫びと共に岩石剣を振るって、電柱ごと斬り砕く。

セイバーはそれを上手く回避して、別の電柱に飛び移る。

そして電柱と電柱を飛び渡り、一気にイリヤの眼前へと迫る。

セイバーがイリヤの前に立ち、ジッと見つめる。

どうやら、何か考えることがあるらしい。

しかし、バーサーカーはそれを与える暇もなく攻め込んでくる。

不意を突かれたセイバーはそのまま吹き飛ばされ電柱に激突する。

「セイバー!!!」

士郎の声が響く。

「そこよバーサーカー、一思いにやつちやいなさい。」

イリヤの命令にバーサーカーが剣を振りかぶり、斬りかかる。

セイバーはそれを受け止めるために、剣を構える。

だが、このままではセイバーは吹き飛ばされるだけだろう、そう思ったとき、

『I am bone of my sword. (体は剣で出来ている。)』

「。。」

バーサーカーの剣がセイバーに迫る。

「くっ!!!」

セイバーも剣を握りしめ、備える。

『ロー・アイアス（熾天覆う七つの円環）』

その瞬間、セイバーとバーサーカーの間に七つの花卉の様な盾が現れる。

その盾はバーサーカーの剣を弾いて、セイバーを守る。

「なっ！！」

セイバーもその盾の出現に驚きを隠せない。

そして、バーサーカーの一撃を防ぐほどの強度を誇る盾など。

『やれやれ、えらく遅いと思ってきてみれば。』

此方に視線が集まる。

私は電信柱に立って見下ろしている。

視線を気にせず更に言葉を続ける。

『まさかバーサーカー、大英雄ヘラクレスを相手にしているとはな。』

「うそ！！」

私の言葉にどうやら凜が驚いたらしいな。

セイバーはあまりのことに呆気にとられているのだろう、士郎は…

……、気にするだけ無駄だろう。

イリヤは此方を睨み付けているな、妹から睨まれると嫌な気分だな。バーサーカーは凄い形相で此方を見ているが、イリヤの下に戻っている。

まあ、仕方あるまい。凜にしてはまさかヘラクレスとは思っていない

かったのだろう。

イリヤの場合は簡単に当てられたのが原因だろうな。

「こんばんわ、お兄ちゃん。」

イリヤがそう言って此方を見る。

『初めましてと言ったところか、イリヤ。』



## 第十章 最凶のサーヴァント（後書き）

なんだか更新が不定期になってきました。

工業生で学年五位以内ならば親がなんにも言わないのですがさすがに十位を超えるとパソコンが取り上げられるので勉強を重心においてしまいます。

まあ、内の学年一位はニコニコのシンガーですが、とても気が合います。

## 第十一章 バイサーカー（前書き）

バイサーカーソウルが止まらない。

## 第十一章 バーサーカー

『初めましてと言ったところが、イリヤ。』

私がそう言うと、イリヤの顔が強張る。

「バーサーカー……！」

叫ぶように命令する。

すると、バーサーカーは雄叫びを上げて此方に飛んでくる。

前日も思ったが身軽な奴だ。

私はそれを、ジャンプすることで回避するが、電柱が破壊された。

明日の夕刊には載るだろうな。

そんなことを考えながら、セイバーの前に降り立つ。

「信一、貴方は一体。」

セイバーがそう言ってくるが、おそらく先ほど出したローアイアスの事だろう。

しかし、今はそれを話しているほどの余裕はない。

『すまないがセイバー、話は後だ。君は士郎達を頼む。』

「幾ら貴方でも、あれは。」

確かにそうだろう、セイバーの心配は当然のことだ。

どんなに強くとも人である限り、バーサーカーに勝つのは難しいだろう。

あのメンバーは置いといてだ。あれは例外だからな。

それに、戦わねばならない理由がある。

『頼む。』

「……………解りました。ですが、危なくなったら助けに入ります。」  
信一の有無を言わせぬ言葉にセイバーは渋々といった風に士郎達の

方に下がった。

アーチャーは今頃衛宮邸で、庭の片付けをしているだろう、私はそう言う人間だからな。

『此方も戦いを再開しようか、イリヤ。』

そう言うのと、イリヤの前にバーサーカーがいる状態に戻っている。

イリヤは何故その名を知っているのかという疑問を持っているようだが。

「本気なの、お兄ちゃんじがバーサーカーに勝てると思ってるの。」

『なに、妹の遊びに付き合う兄の気持ちさ。』

そう言うのとイリヤの顔が更に強張った。

どうやら今の発言で、私が知っていることに気が付いたのだろう。

「バーサーカー、さっさとやっっちゃいなさい。」

「バーサーカー」

バーサーカーが雄叫びを上げ、剣を振りかぶる。

振りかぶった剣を自分お前に振り下ろし、地割れを起こさせる。

それは私の下まで伸びてきて、衝撃波を放つ。

私はそれを上に飛ぶことで回避する。電信柱に乗った、私は弓を出す。

『行くぞバーサーカー。』

s a i d   イリヤ

お兄ちゃんが私の名を言ったときは驚いた。

それも、イリヤスフィールじゃなくて、イリヤと言ったのだ。

なぜ、何故知っているの。

何も知らずに育ってきたはずなのに。

それだから、私はお兄ちゃん達を殺そうとしたのに。

そして何故お兄ちゃんは、私の名を言ったときに悲しそうな顔をす

るの。

まるで、知っているかのように。

「本気なの、お兄ちゃんじがバーサーカーに勝てると思っているの。」

「私がそう言ったときに、お兄ちゃんは。」

「なに、妹の遊びに付き合う兄の気分さ。」

そう言った、何故妹だと知っているの。

わからない。

でも、私は怖くなった。

自分が変わってしまいそうで。

お兄ちゃん達を殺そうとした自分が変わってしまいそうで、壊れてしまいかもしれなくて。

だから私はバーサーカーに命じた。

「バーサーカー、さっさとやっちゃいなさい。」

そうすることで、目の前にいる信一から逃げようとした。

バーサーカーの攻撃を避けたお兄ちゃんは言った。

『行くぞバーサーカー。』

その時信一が本気でヘラクレスと戦おうと、勝とうとしていると気付いた。

できっこないのに、でも。

信一なら本当にやりそうな気がした。

s a i d o u t

『行くぞバーサーカー。』

「――」

信一の言葉にバーサーカーは言葉にならない叫びで応える。

そのままバーサーカーは跳躍して信一に迫る。

信一はそれより更に跳躍して、弓を構える。

『I a m t h e b o n e o f m y s w o r d . ( 骨子

は捻れ狂う。』

一本の矢が投影される。

その矢はランサー戦で出した物と似ているが、更に形を変えていた。バーサーカーは構わず突っ込んでくる。

事実、人が放つ魔術での攻撃など。バーサーカーはかわすこともない。

『カラド・ボルグ？（偽・螺旋剣？）』

信一が放った矢は、バーサーカーを吹き飛ばす。

その光景に全員が驚く。

なにせ、英霊<sup>セイバー</sup>の攻撃を受けてもびくともしなかったバーサーカーを吹き飛ばしたのだ。

吹き飛ばされたバーサーカーはそのまま地面に落とされて叩き付けられる。

しかし、その程度で倒せるのなら英霊とは言えないだろう。すぐに立ち上がり、此方を睨み付ける。

セイバーはこの時、気付いた。

今の状況なら、マスターであるイリヤを簡単に狙えるのではないかと。

信一はそれを見透かしたようにセイバーに話す。

『セイバー、絶対に手をださなくてくれよ。』

そう言われては、セイバーも手を出すことが出来ない。

『トレース・オン（投影開始）』

信一はそう言うのと両手に干将莫耶を投影する。

『気を抜けば一瞬でやられるな。なら、最初から思いっきり行くぞ。』

そう言って、バーサーカーに向けて斬りかかる。

ガキーン！！

案の定それはバーサーカーの岩石剣によって防がれてしまう。

しかし、それも織り込み済み。

弾かれても更に斬りかかる。

それにバーサーカーも剣で対応する。

両者は激突に激突を重ね、信一は二十年間の戦いの中で更に極めた、能力を持ちいて。

ヘラクレスは狂気に満ちても尚、イリヤを守るうとする心で。

両者の激戦は一步も引かぬ戦いとなっていた。

信一が田んぼの中で弓を構える。

バーサーカーは田んぼの中にまで入って斬りかかってくる。

『チツ!!』

その行為に信一は舌打ちして回避する。

しかし、バーサーカーは更に追い打ちを掛けてくる。

「――」

雄叫びと共に、剣を振り下ろし信一を斬ろうとする。

バーサーカーの一撃を受けてしまえば、さすがにこの身が強かろうと死んでしまうかもしれない。

信一は何とか横に飛び退くことで回避するがその剣から放たれる衝撃波で吹き飛ばされてしまう。

吹き飛んだ信一はそのまま壁に激突する。

『ガハツ!!』

あまりの衝撃に、体内から逆流した血が口から流れる。

さすがにダメージを受けすぎたようだ。

## 第十一章 バーサーカー（後書き）

前書きで意味不明なことを言ったことを謝罪いたします。

国家試験に向けて勉強をしなければならぬので当分更新が出来ないため、一気に何話か更新したいと思います。



## 第十二章 投影魔術

信一はその場に膝を突く。

『なるほど、確かに最強のサーヴァントだ。』

一応皮肉を言う余裕はあるらしいが、おそらくボロボロも良いところだろう。

それを見てバーサーカーが信一に近づく。

信一の状況は絶体絶命となっていた。

セイバーはすぐにでも助けに行こうとした、だが。

笑っている。信一はあろう事かこの状況で笑っているのだ。

「お兄ちゃん、まさか気でも狂ったの。」

イリヤがそう尋ねる。

その問いにも信一は笑いながら答える。

『誇り高き、大英雄ヘラクレスよ。これまでご無礼を働いたこと、謝ろう。』

信一は膝を突きながらもそう言った。

それを聞いて、土郎達はどうしたのだと思った。

土郎からすれば信一がボロボロになる姿など想像もしていなかったのだ。

「まさかお兄ちゃん、今更命乞いをするつもり。」

イリヤの言葉に凜はまさかと思った。

いくら何でも弟を売ってまで助かるうとはしないだろうと思っていたからだ。

「まあ、助けてあげても良いけど。お兄ちゃんには聞きたいことがあるし。」

そう言ってイリヤは笑った。

しかし、セイバーは何故か信一は絶対に裏切らないと思った。

理由はわからない、だがそう思ったのだ。

そして信一はイリヤの言葉をフツと笑って答えた。

『故に今から本気で行く。遅れたら死ぬと思え。』

そう言った瞬間、信一から殺気が溢れ出してきた。

「！！！」

その殺気を感じて、イリヤが後ずさる。

そしてそのイリヤを守るようにバーサーカーが入り込んでくる。

バーサーカーも信一の変わりように警戒している。

『トレース・オン（投影開始）』

信一の右手の掌にバカでかい剣の形の魔力が形成されていく。

それは今バーサーカーが持っている武器と全く持って酷似している。

まるで、写真のように細部まで一緒なのだ。

『トリガー・オフ（投影装填）』

そう言うと、信一の持つ岩石剣が完全に投影される。

それをバーサーカーに向けて言い放つ。

『行くぞヘラクレス。命の貯蔵は十二分か。』

信一が本気での戦いを始める。

二人の睨み合いの中で、先に動いたのはまたしても信一であった。

頭部から流れ出る血で顔を濡らしながらも、バーサーカーに向かっ

て突っ込む。

『ハアア！！！！』

信一の声と共に二人の剣がぶつかり合う。

ガキーン！！

ガアン！！

バキーン！！

今度の斬り合いは先ほどと打って変わって力と力の勝負。

両者が正面から斬り合い、ぶつかり合い、己の目の前にいる存在を

打ち砕かんとする。

両者の激突によって発せられる衝撃音が周りに響くがおそらく結界か何かが張られているのだろう、どの家も反応しない。

信一がバーサーカーと打ち合える理由は信一の投影にあった。  
信一は投影の時に、その武器に込められた年月などを再現することが出来る。

つまり、今の信一はヘラクレスの動きをトレース（投影）しているのだ。

このまま行けば、スタミナの問題で信一が負けるだろう。  
幾ら動きはトレースできても、スタミナはトレースできない。  
しかし、このまま行けば朝になる。

朝になれば幾ら人払いの结界を張っておいても無理がある。  
信一は朝まで持てばいいのだ。

それに気付いた、イリヤはバーサーカーに本気を出させる。

「バーサーカー、やっちゃいなさい。」

「――」

イリヤの命令に答えて、バーサーカーの纏う空気が変わった。  
まるで、ランサーが宝具を使ったときのように。

それを見て、信一も構える。

『トレース・オン（投影開始）』

信一の魔術回路に一気に魔力が流れ込み溢れ出す。

バーサーカーは剣を振るい、信一に斬りかかる。

『トリガー・オフ（投影装填）』

バーサーカーを睨み自分も剣を振りかぶる。

『セット（全工程投影完了）』

バーサーカーの剣戟が目の前に迫る。

宝具、ナイン・ライプス（射殺す百頭）

バーサーカーの宝具が放たれる。

『ナイン・ライプス・ブレイドワークス（是、射殺す百頭）』

信一もバーサーカーと全く同じ技を繰り返す。

ナイン・ライプスとナイン・ライプス・ブレイドワークスが、十二の  
剣戟が両者の間でぶつかり合う。

両者の攻撃は全くの互角、ならばそれを変えるのは、

「狂いなさい、バーサーカー。」

「――」

イリヤの言葉と共に、バーサーカーの剣戟に力が増す。

「うそ、まだ狂ってなかったって言うの。」

凜が驚愕の声を出す。

狂気とはバーサーカーのクラスが持つ特殊な能力で、知能を一切捨てることで能力を増すのだ。

そして、最後の一撃で信一が弾き飛ばされて、壁に激突する。

狂気を纏った、バーサーカーが信一に迫る。

「――」

「させない。」

ガキイン！！

バーサーカーの剣を防いだのは、セイバーであった。

信一の危険を感じて、入り込んできたのだ。

だが、セイバーでも狂気を纏ったバーサーカーにとまともに打ち合うのは分が悪すぎた。

剣を思いつきり弾かれて、大きな隙が出来てしまう。

「しまった。」

「――」

セイバーが気付いてももう遅い、バーサーカーの剣はもう迫っている。

この一撃を食らったら、致命傷だろう。

## 第十三章 敗北

おそらく当分戦線復帰は出来ない、前の歴史なら此処で士郎が助けにはいるのだが。

今回は離れすぎているため間に合わない。

セイバーが覚悟したその時だった。

ドン！！

セイバーの体が横に弾かれる。

信一がセイバーを弾いたのだ。

案の定セイバーが喰らうはずだった、一撃を信一が喰らう。

弾き飛ばされる中で見た信一は何故か笑っていた。

そして、信一はバーサーカーの一撃で文字通り吹き飛ばされた。

まるで紙のように吹き飛んだ信一は道路に投げ出される。

信一はそのまま倒れ込み、動かない。

「兄貴ーーーーー！！！」

士郎の叫びが木霊する。

その中でセイバーはバーサーカーに構える。

しかし、バーサーカーはそのままセイバーの隣を通り過ぎて、イリ

ヤの下に戻る。

そしてイリヤは、

「今日はここまでね、じゃあねお兄ちゃん。」

そう言つてバーサーカーに抱えられて何処かへ行つてしまった。

何処に向かったかは定かではないが、今はそんなことを気にしている暇はない。

「信一！！！」

セイバーが信一の下に駆け寄る。

信一はまだ意識は微かにあるらしく、反応する。

『セイバーか』

「そうです、ですが喋らないください。」

そう言うとセイバーは信一の服を破いて傷口を確認する。すると、まるで抉り取られたかのような傷が残っていた。

「兄貴、大丈夫か。」

「ちよっと、大丈夫。」

士郎と凜も駆け寄ってくる。

凜はその傷口を見て手持ちの宝石を取り出そうとする。

しかし、信一はそれを制する。

『大丈夫だ。』

「何が大丈夫ですか。このままでは間違いなく死にます。」

セイバーがそう言う。

確かに普通ならば、このまま出血多量で死んでしまっただろう。

普通ならの話だが。

『あいにく、この体は特殊だね。これ程の傷でも一日寝れば治る。

だから、心配しなくていい……………。』

その言葉と同時に信一は意識を闇へと落とした。

「信一……！」

セイバーのその叫びが信一が最後に聞いた言葉であった。

s a i d    セイバー

『ナイン・ライブス・ブレイドワークス（是、射殺す百頭）』

信一はバーサーカーの宝具に全く同じ技で挑んだ。

異常だった、どんなに強かろうが人がサーヴァントの宝具に対抗できるはずがない。

しかしどうだろうか、信一はバーサーカーの宝具と互角に打ち合っている。

今の私にはそれを出来る自信がない。

「狂いなさい、バーサーカー。」

その声と共にバーサーカーの雄叫びが響き技に威力が増す。

そしてバーサーカーの宝具はジリジリと信一を追い込んでいき、最後の一撃で信一を吹き飛ばした。

信一は壁に叩き付けられる。バーサーカーが更に迫る。

その時私はとつさに飛び出した。

「させない。」

そう言つてバーサーカーの剣を受け止める。

ガキーン!!

しかし、狂つたバーサーカーの力は私の予想を大きく上回っていた。バーサーカーの剣戟に私の防御は崩され、大きな隙が出来てしまった。

気付いたときにはもう遅かった、既にバーサーカーの剣が迫っている。

やられる、そう思つた時。

ドン!!

私の体は信一によつて横に飛ばされていた。

何を？

私がそう思つたとき、信一が笑っていることに気が付いた。理由はわからない。

そして、信一が私を庇つてバーサーカーの剣を喰らつた。

信一はまるで紙切れのように吹き飛ばされた。

吹き飛んだ信一は起きる気配がない。

「兄貴ーーーーー!!」

士郎の叫ぶ声が聞こえる。

しかし、今は気にしている暇はない。

すぐさまバーサーカーに備えて構える。

しかしバーサーカーは予想に反して、私の横を通り抜けてイリヤの下へと戻る。

その後イリヤは去つていった。

私はすぐさまに信一の下に向かいました。

信一は一応意識があったようですが、すぐに気を失ったため家に運んでいった。

凜の話では、しばらく寝ていれば大丈夫だそうだ。

「貴方は何故、私を庇ったのですか。」

私は1人そう呟いた。

私は今貴方が眠っている布団の側にいます。

だから、早く目覚めてください。



## 第十三章 敗北（後書き）

一旦此処までとさせていただきます、これ以降は国家試験が終わり次第、再開したいと思いますので宜しくお願いします。

## 一時打ち切りのお知らせ

この度はこの聖杯に導かれし者をご覧になって下さってありがとうございます。  
ございます。

しかしながら私の手違いによって作品の下書きを全て消去してしま  
うと言う失敗をしてしまいました。

そしてこれから国家試験の勉強を本格的に始めなければなりません  
のでその状況で二作品を書くのは若輩者には困難ですので一時此処  
で打ち切りにしたいと思います。

しばらくはもう一つの作品だけにしますのでこの作品の復帰は長ら  
くお待ちになると思います。

しかし復帰の要望があれば試験終了後にまた頑張りたいと思います  
ので宜しく願います。

## 第十四章 過去（前書き）

どうもお久しぶりです。

これからこの小説を再開したいと思います。

## 第十四章 過去

s a i d o u t      これはセイバー s a i d の途中でもありませんから、あしからず。

信一は、あの後セイバーに抱えられて家に連れて帰った。

途中の帰路で会話はなく、重苦しい空気が漂っていた。帰ってから凧は信一の傷口を調べた。

すると驚くことに傷口が治り始めているのだ。

「何よこれ、どんな作りしてんのよ。」

そう言わずにはいられなかった。

確かに彼は、一日寝れば治ると言っていたがあくまでそれは冗談と思っていたのだ。

しかし、これを見てはそれが冗談には思えない。

とは言ったものの、体の細胞が治っているだけで意識が戻るのはまだしばらく先のことだろう。

凧は士郎達にそれを伝えるために部屋を出る。

「遠坂、兄貴は大丈夫なのか。」

部屋の外で待つていた士郎が凧に容態を尋ねる。

その横にいるセイバーも心配そうに此方を見ている。

仕方ないだろう、この傷はセイバーを庇った所為でこうなったのだ。

「はつきり言つて無駄ね。」

その言葉を聞いて、士郎が焦った風に尋ねる。

「無駄つてどういう事だよ。」

「焦らないで、衛宮くん。」

それから凧は順を追って士郎に話した。

異常なほどの回復力で一日ほど休めば大丈夫と言うこと、それと目覚めるのはしばらくしてからなど。

それを聞くと、士郎は安心したように呟く。

「そうか、なら良かった。」

しかし、問題はこれで終わりではない。

「問題はこれからよ、衛宮くん。」

「え？」

「今までは衛宮くんには、衛宮先輩という心強い味方がいたけど、今衛宮先輩は戦えない。だから貴方は、セイバーと二人で戦わなければならぬの。決意を決めなきゃ駄目よ。それじゃあわたしは帰るわ。」

そう言っただけは玄関に向かって歩いていった。

そして、玄関を出て、そこで立ち止まり振り向いて言う。

「これからは、私も敵よ。」

そう言っただけは去っていった。

士郎はその後ろ姿を見ていた。

「戦いか、兄貴が倒れた今。俺がしつかりしなきゃいけないんだ。」

士郎は何かを決心したようにそう言った。

その決心が何を生むのかを士郎はまだ知らない。

それが、幸運を呼ぶのか不幸を呼ぶのか。

「とりあえず、桜達が来る前に朝食の準備をしておくか。」

そう言っただけは、台所へと向かった。

台所に着いた士郎は、今朝の朝食の献立を考えていた。

「この前、桜が作り置きしていたアサリの佃煮が残っていたはずだよな。」

その事を思い出し、冷蔵庫を開ける。

すると、中には士郎が予想していたとおり、アサリの佃煮が入っていた。

「後は、みそ汁と魚の照り焼き、それとホカホカのご飯で良いだろう。」

そう決めるとすぐに準備に取りかかる。

信一特製の味噌を使って味噌汁を作り、魚を照り焼きにする。

照り焼きはタイミングが大切だ。

焼きすぎずに出しても駄目だが、早すぎても駄目という微妙なタイミングが大切なのだ。

もちろんそれも、信一から習ったものだ。

ふと思えば、自分は兄貴が引いてきたレールの上を走ってきているのではないかと。

そして、士郎にとって信一は、父切継と同様に憧れの存在なのだ。だが、それが士郎自身の重みとなっていることを士郎は知らない。ピンポン！！

どうやら桜達が来たようだ。

いちいち呼び鈴を鳴らさなくても良いのに、と思いながら玄関に向かう。

「おはよう桜。」

玄関を開けながら目の前にいた桜にそう言つと桜も同じように返す。

「おはようございます、先輩。」

「おっはよー、士郎。ご飯出来てる。」

どうやら藤ねえも来ているようだ。

「後は盛りつけるだけだから、居間に行っていて良いよ。」

「なら手伝います、先輩。」

そう言つて士郎と桜の二人は台所へと向かった。

それを見た大河が、

「青春ねー。」

と言つたのは誰の耳にも届いていなかった。

朝食を盛りつけ、居間に向かう。

そこには既に藤ねえがご飯を今や今やと待っていた。

さすがは冬木の虎だ、常に腹を空かしていると兄貴が言っていたが本当なのか？

「そう言えば、信一は。」

藤ねえが思い出したように士郎に言う。

士郎はとっさに思いついたことを言う。

「兄貴か。兄貴はあの後風邪を拗らせて今もまだ寝込んでるよ。」

「え、それって大丈夫なの。お医者さんは呼んだの。」

「ああ、医者の話ではしばらく休めば、すぐに治るでしょう。だそ  
うだ。」

士郎は口からでまかせを続ける。

士郎は嘘をつくときに目をそらすのだが、今の二人は信一のことを心配しているため、それに気づけない。

「なら、お粥でも作っておきましょうか。」

桜が心配そうに言う。

（ああ、心が痛い。）

そう思いながら桜にはいいと言っておく。

「一応俺も作って起きたし、それに歩く分には支障はないからたぶん大丈夫だよ。」

「わかりました。」

士郎の言葉に桜は渋々従う。

あいにく虎にそんな料理能力は無いため、聞くだけ無駄と言うことだろう。

士郎は此処でセイバーのことを紹介しようと思ったが、セイバーは今信一の側にいる。

たぶん自分のことを責めているのだろう、かつての士郎がしたように。

今はそつとしておいてやろう。

紹介する分は夕飯の時でも出来るしな。

それに兄貴も誰かが付いていた方が良いだろう。

そう決めると、士郎も食事を続行する。

「そうね、信一はしばらくお休みね。わかったわ、三年の先生には私から話しておくから。」

「良いのか藤ねえ。」

「この私にまっかせなさい。」

久しぶりに虎が頼りに思えた士郎であった。ほんとに久しぶりだが。

s a i d    セイバー

三人が出て行った後の家はガランとして静まりかえっていた。

セイバーは未だ目覚めぬ信一の横で座っているため、この家に残っているメンバーは活動していないのだ。

そして唯一、起きているセイバーは信一の顔をジッと見つめていた。セイバーは葛藤に襲われていた。

何故私は信一がバーサーカーの攻撃を受けたときに悲しんだんだ。私が守るべき存在は士郎の筈なのに。

私には叶えなければならぬ願いがある、出もそれは信一を犠牲に少しでも叶えなければならぬことなのだろうか。

そして何故私は彼の心配をしているのだ。あの状況で私が士郎の下を離ればバーサーカーは二人を襲っていたかもしれないのに。

私はそれにも構わず信一を庇った。何故、わからない。

セイバーが己の願いと心の狭間で葛藤しているとき、眠っているはずの信一が声を出した。

「くっ!!」

それを聞いたセイバーはハツとなり信一を見る。しかし、信一はまだ眠ったままだ。おそらく寝言だったのだろう。

しかし信一の表情は苦悶に歪んでいる。「止めてくれ、許してくれ。」

信一は顔を歪ませながらも、そう呟く。その声はとても弱々しく、日頃の彼からは考えられないほど弱った声であった。

それを見て、セイバーは信一の手を握りしめる。

なぜそうしたかはわからないが、そうするとすこしずつ信一の顔が



穏やかになっていった。

「セイバー。」

私は聞いた。信一が私の名を言ったことを。

しかし、あつて間もない彼が何故私の夢を見る。

そもそも彼には謎が多かった。セイバーの召喚の際に使った黄金に輝く剣。

あれは私が生前使っていた聖剣、その贋作だろう。

しかし、あれには蓄積された年月が籠もっていた。

そして、ランサー戦やバーサーカー戦で見せた動きと冷静さ。

あの動きはいくら何でも、人には出来ない。

そして幾ら戦いの経験を積んできても、バーサーカーを前にあのように戦えるはずがない。

そして信一が使ったあの剣戟、あれはどう見てもバーサーカーの剣戟を真似たとしか言いようがない。

何故そんなことが出来たのだろうか、それらを聞き出さねばならない。

そう思っていた心に、更に信一が呟いた言葉でセイバーは絶対に聞こうと思った。

「アルトリア。」

「!!!」

それを聞いたときには驚いた。

何故、何故!!!

「貴方が、私の真名を知っているのですか。貴方は一体何者なのか。」

そう思わずにいられない、セイバーであった。

## 第十四章 過去（後書き）

これから再開。

一応次の次ぐらいから原作と分岐します。

第十五章 悪夢 土郎の戦い（前書き）

今回は連続投稿です。

久しぶりに載ってきました。

## 第十五章 悪夢 士郎の戦い

s a i d 信一

セイバーを庇って気を失った信一は夢を見ていた。

それはかつて信一が体験した出来事。

それはまだ、彼が衛宮信一でもなく、アーチャーでもなく、衛宮士郎だった頃の話。

もう遙か遠くの記憶なのに、今でも鮮明に覚えている。

あれはまだ士郎が、七歳だった頃の話。

絶対に忘れはしない、あれが 士郎としての終わりと衛宮士郎としての始まりだったのだから。

あの日、俺はいつもと変わらずに友達と遊び、そのままベットに潜り込んだ。

別にいつもと変わらない夜の筈だった。だが、一瞬で士郎の世界は一変した。

目を開けてみれば炎。周りを見渡せば一面が火の海。自分が住む家も跡形もなく、形を保っていなかった。

屋根は崩れ、壁はなく、風をしのぐ物はない。

士郎は、両親を捜して家だった場所を探した。

だが、既に家は火の手に包まれつつある。

士郎が入るには無理があつた。そして士郎は歩き始めた。

もしかしたら、他に生き残っている人がいるかもしれない。

そして、士郎は気が付いた。周りから声が聞こえてくることに。

その声はどれも助けを求めている声ばかりだった。

だが、こんな少年に何が出来るだろうか。士郎は怖くなってその場を逃げ出した。

そしてやがて雨が降り、火の手を消していく。

そして火の手は完全に無くなり、少年はまた歩き出す。

そして士郎は何かに躓いて転けてしまった。

士郎は自分を転けさせた物を見た。その瞬間目を見開いた。真っ黒な何かが、転がっている。それはよく見ると人の形をしている。

そう、家事で焼け焦げた人なのだ。士郎は周りを見回した。

そして目に入ってきたのは、死体、したい、シタイ、元の原形を留めてない物もあった。

そして、士郎の目に1人の死体が目に入った。

その死体は、何かを大事に守ろうとしているかのようにだった。

それが守ろうとした物は運良く、焼けていなかった。

そしてそれには、士郎の名が付いたブレスレット。

それは士郎がお小遣いを貯めてやっとの思いで買った、ブレスレット。

それは士郎が好きだった少女にあげた物。つまりこの死体は、カノジヨノモノ。

『うわあああああああああああああああああ！！』

この時、士郎の中で何かが壊れた。

それからのことは憶えていない、気が付けばベットの上だった。

そしてその後士郎は切継に引き取られた。

しかし、それから士郎は悪夢に魘され続けた。

何故、見捨てた。

何で、助けなかったの。

貴方だけ助かるなんて。

一緒に死ねば良かったのに。

生き残ったことが士郎を更に追いやった。

その夢にうなされ続けた。切継は俺に何もしてくれなかった。

否、何も出来なかったのだ。今までもろくに子供の世話などしたことのない人間が、簡単にできるはずがなかった。

そんなとき助けてくれたのが藤ねえだった。

魔される俺を抱きしめて、泣き出す俺を慰めてくれた。きつと、藤ねえが居たからこそ俺は今の自分でいられるのかもしれない。

そして士郎は切継との約束して、切継も亡くなった。

英霊になってから知ったことだが、彼は聖杯の泥に侵されていたと言った。

結局は衰弱して亡くなった。士郎は葬式の際に泣かなかった。

約束したから、絶対に強くなると。

だが、その光景はあまりにも痛々しかった。

それからは、藤村組の組長である、雷画爺さんの助けを借りて育ていった。

そして、あの事件から十年の月日が流れた。

そして、聖杯戦争が始まった。士郎もそれに参加した。

あの悲劇を繰り返させないために。

セイバーと出会った。

セイバーと共に聖杯戦争に挑み、戦った。

戦いは苛烈を極め、多くの者が傷ついた。

そして、セイバーがギルガメッシュを、士郎は言峰綺礼を打ち破り聖杯を破壊することに成功した。

そして、セイバーとの別れに士郎は彼女の名を口にした。

『ありがとう、アルトリア。』

そして彼女は光に包まれて、この世界を去っていった。

s a i d o u t

「信一、起きたのですか。」

セイバーがそう言ってくれている。

信一は何故セイバーが自分の手を握っているか気になったが。

セイバーからすれば苦しそうにしていたためそうしたのだが、寝て

いた信一が知るよしもなく、

『おはようセイバー、所で何故君は私の腕を掴んでいるのかな。』

「ハッ。す、すいません。」

何故か顔を赤くして、手を離すセイバー。

それを見れば首をかしげながら、立ち上がろうとする。

それを見たセイバーがあわてて止める。

「駄目です、貴方はバーサーカーの本気の一撃を受けました。幾ら貴方でもまだ駄目です。」

そう言つて信一を寝かせる。

信一も確かにまだ本調子ではないため、回復に専念するために横になる。

しかし、セイバーが信一を寝かせた理由はまだあつた。

「信一、貴方に聞きたいことがあります。貴方は先ほど私の真名を呼びましたが何故ですか。」

そう言われて気が付いた。

どうやら先程の夢の中で話した言葉が寝言として出ていたようだ。

我ながら失敗したと思つた。

『何のことかね、私にはサツパリなのだが。』

信一は平然とそう言つた。

もちろん内心は焦りまくつてはいるが経験のお陰でそれを表には出していない。

「惚けないでください。私はこの耳で確かに聞きました。」

セイバーはそう言つと信一に迫る。

それを見てどうやら誤魔化しはきかないと悟つた信一は表情を一変させた。

『今はこれ言う時期ではない。』

信一はアーチャーの時の表情でそう言つた。

それを見たセイバーは息が詰まつた。

騎士として戦場に立つてきた自分に此処まで恐怖させるとは想像も出来なかつたのだ。

『確かに気になるだろう、だがいずれ話すと思う。だからその時を待ってくれないか。』

そう言ったときの表情はアーチャーのものではなく信一の優しい表情であった。

「……………分かりました。」

セイバーは渋々といった風に頷いた。

それを見ると信一はセイバーの頭をそつと撫でる。

「な、何をするのですか／＼」

セイバーは顔を真っ赤にして言った。

『そう気張ることはない。アレは俺がしたくしてたことだからな。』

「で、ですが。」

『なら、これはその代わりと言うことだ。』

「なっ／＼」

そう言つてセイバーは信一に頭を撫でられた。

しばらくすると信一は撫でるのを止め、立ち上がった。

セイバーは名残惜しそうに信一を見上げる。

『まずは昼食にしよう、その後は昼寝できるかな。』

そう言つて信一は台所へと歩いていった。

s a i d 士郎

士郎はいつも通り帰ろうかと思つていたが、一成が話していた綾子が行方不明だという話を聞いたため、それが気になり生徒に話を聞いてたためかなり遅くなつていた。

「もう誰も残っていないか。」

人気の無くなつた教室を眺めながら呟く。

「もう遅いし、今日は帰るか。」

そう言いながら鞆を持ち、下駄箱に向かうために階段に差し掛かったとき、不意に人の気配を感じて階段を見上げる。



そこには、遠坂が居て此方を見下ろしていた。

「遠坂、まだ残ってたのか。」

そう話しかけても遠坂は何も話さずに此方を見ている。それを見て凄く嫌な気がした。

「何だよ、話が無いなら行くぞ。」

そう言っただけで歩き出そうとした瞬間、遠坂に呼び止められた。

「衛宮くん、自分が何処までお馬鹿さんかわかってる。」

そう言いながら階段を下りてくる、此方から見れば凄く不気味に見える。

「マスターがサーヴァント無しでノコノコ歩いてるなんて、殺してくださいって言ってるようなものよ。全く呆れたのを通り越して頭に来たわ。」

遠坂はそう言っただけで腕をまくる。

おそらく魔術を使うつもりなのだろう。

普通は人目の付かないところで戦うのだが、あいにくこの場に人目はない。

なるほど、確かにこの場で戦うのなら誰にも見られないだろう。

「そうか、戦うのなら此方は逃げさせて貰うからな。」

「そう、でも苦しいだけよ。どうせ勝つのは私なんだから。」

そう言っただけで遠坂の左の二の腕辺りが光り出す。

そう言えば思い出した、昔兄貴が言っていたような気がする。

『良いか士郎。遠坂の魔術は主に宝石魔術が主流だ。だがな、もう一つ注意しなければならない物がある。』

そう言ったのは俺が魔術について本気で取り組み始めた頃、兄貴が知る他の魔術師のタイプの話をしてくれたときだ。

俺は未だに投影も完全ではないが聞いておいて損はないと思ったからだ。

「注意しなければならぬ物？」

『そうだ、ガンドと言ってな。指先から魔術の弾丸を放つんだが。』

当たると人体に異常をおこしてしまうんだ。一発をかわすのは難しくないが、これは連続で撃つてくるから気をつけないと痛い目を見ることがなるだろうな。』

ちなみに、人を指さすのが失礼な行為なのはこのガンドに由来しているらしいが。

おそらくあれが兄貴が言っていたガンドだろう。  
当たらなければどうってこと無いが、連射はやっぱりだ。  
それにこの狭い階段じゃこっちが不利か、なら。

有利な状況を作り出すだけだ。

「トレース・オン（投影開始）」  
小さなナイフを投影して遠坂に投げつける。

しかし、それは遠坂に簡単に避けられてしまう、当たり前だ。  
わざとかわしやすい場所に投げたのだ、この程度かわせなければ俺の相手にならない。

この投擲の理由は遠坂の体勢を崩すことに意味があるのだ。  
俺は遠坂がかわしたのを見てから走り出す。

「ちよつと、待ちなさい。」  
待てと言われて待つ奴などいないぞ遠坂。

遠坂もすぐに立ち上がり走って追いかけてくる。  
すると後ろから、魔力の弾丸が飛んできていることに気付いた。  
ダダダダダダダ！！

マシンガンのように連続的に撃ってくる。  
しかし、そのほとんどは見当違いなところに飛んでいる。

理由は簡単だ、遠坂が走りながら撃っているからだ。  
走っていると必ず手がぶれて標準がずれてしまう。  
それにガンドは直線にしか飛ばないから、ちよつとしたズレで大きく的から外れてしまうのだ。

その為このタイプの技は待ち伏せしてやってくる敵を仕留めた方が  
良いそうだ。だが、

「うわー!!」

一発のガンドが士郎の肩を掠める。

「数打ちや当たるといふ言葉は、まさに今の状況にピッタリだよ。」

「あら、冗談を言う余裕があるなんて失礼ね。」

しかしながら士郎の言っていることは、全くの事実なのだが。

しかし、このままではジリ貧で此方が先にやられるだろう。

なら、こっちの有利な状況に持ち込むまでだ。

そう思い士郎は一つの教室に入る。そして扉を閉め強化を掛ける。

どうせ外から逃げようとしても結界でも張られるだろう。

だったら、俺がやることは一つだ。

士郎の手が汗で湿る。

ダダダダダダダダダダダ!!

強化した扉にガンドが放たれる。

あの量ではそう遠くないうちに破られるだろう、士郎は場所を移動する。

そしてドアが破られた瞬間、廊下に飛び出る。

バリイン!!

教室の廊下側のガラスを割って出てきたため、遠坂は呆気にとられている、

そしてその一瞬の隙について、士郎は凜を壁に押しつける。

あいにくアーチャーは屋上で警戒中だ。今は居ない。

つまり、今度は此方が絶体絶命の危機に陥ったのだ。

それを知った瞬間凜は冷や汗をかく。

士郎は防戦一方だったとは言えランサーと打ち合ったレベルの武者だ。

それに対して此方は武道の心得はあるが士郎にはとうてい及ばない。現に完全に壁に押しつけられている。

そして士郎の表情は本気そのものだ。

士郎のことなので殺されることはないだろうが、唯ではすまないだろう。

だが、そんな心配は一瞬打ち消されることになる。  
ガバツ！！

士郎が凜から離れて周りを見渡す。  
どうしたのだろう、そう思った。

「今、悲鳴がした。」

「え？私には何にも」

そう言いつつガンドの用意を使用した瞬間。

「キヤアアア！！」

1階の方から悲鳴が聞こえてきた。

「やっぱり、くそっ！！」

そう言つて士郎は1階の方へ走つていった。

「ちよつと待ちなさいよ。」

凜も急いで追いかけていった。

士郎は全力で階段を下りていく。

先ほどの悲鳴は1階の玄関の辺りから聞こえた。

あいにくここからそこまで距離はない。

そして、階段を下りて1階の玄関に向かうとそこには一人の女子生

徒が床に倒れていた。

側に駆け寄ると、女子生徒は意識はなく、生気を吸われているよう

だった。

「校内の結界が発動された！？」

士郎は焦つたように言つて立ち上がった。

すぐに凜が走つてやって来た。

士郎は強化していたため凜の足では追いつけなかったのだ。

「衛宮君、これは。」

凜も女子生徒の以上に気が付き近づく。

「遠坂はその生徒を頼む。」

「ちよつと、何言つてんのよ。」

遠坂がそう言つていたが士郎はそれを聞く暇がなかった。

一瞬で察知した殺気、間違いなく此方を狙っている。

士郎は扉が開いていることに気づき、振り向き様に投影した一本の剣を振り切る。

この剣は大して特化すべき能力はないが、使い慣れているため一番手にしっくり来るのだ。

ガキイン！！

士郎が振り抜いた剣はどこからともなく飛ばされてきた金属製の物体を弾き飛ばす。

あいにく不可視の魔術が賭けられているのか、どの様な形かは確認できなかった。

しかし外からの攻撃だろう。

こういう事が出来るのはアーチャーくらいだろうがアーチャーは遠坂のサーヴァントであるためそれは違っただろう。

「後は姿を見せてない、ライダーかアサシン、キャスターの誰かか。」

「一番確率が高いのはキャスターだ。」

この結界を張っているのはキャスターの可能性が高いからだ。とは言え油断は出来ない。

「遠坂、生徒は任せたぞ。」

そう言つと士郎は扉から出て剣を構える。

気配は感じない、恐らく気配を消しているのだろう。

士郎も信一に鍛えてもらった我流の構えでサーヴァントに備える。

ジャラッ

鎖を扱う音が微かだがどこからか聞こえてきた。

それを聞いて聞こえた方にとっさに振り向き剣を振るう。

そして飛んできた何かを弾き飛ばす。

「あっちか。」

士郎はそう言つと脚部に強化を掛けてサーヴァントが居ると思われる方に駆けていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8693m/>

---

聖杯に導かれし者

2011年1月13日10時17分発行